

FAIRY TAIL 妖精の戦姫

春葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フィオーレ王国。そこには数多くの魔導士ギルドが存在する。

その中でも色んな意味でその名が広く知れ渡っているギルドがあった。

妖精の尻尾、フェアリーテイル

妖精には尻尾があるのか、ないのか。そんな永遠の謎故に永遠の冒険を求めるギルド。

そこには火竜に加えてもう一人滅竜魔導士がいた。

銀色のストリートヘアに大きな薄緑色の瞳を持つ少女。

この物語は彼女が主人公の物語。

目次

序章

1. プロローグ | 1
2. オリ主設定 | 5
3. 懐かしい面影 | 7
4. 火竜と天竜 | 10

鉄の森編

5. 帰還 | 13
6. 列車内にて | 15
7. 死神エリゴール | 18
8. 妖精の舞う戦場 | 22
9. 三つ目の悪魔 | 26

悪魔の島編

10. 火竜VS妖精の女王 | 32
11. S級クエスト | 38
12. 上陸、悪魔の島 | 40
13. 決断 | 46
14. 災厄の悪魔デリオラ | 50
15. 真実 | 57

幽鬼の支配者編

16. 幽鬼の奇襲 | 61
17. 妖精の反撃 | 70
18. 幽鬼の逆襲 | 80
19. 蘇る記憶 | 89
20. 復活の戦姫 | 92

30.	帰還	135
29.	決戦	131
28.	対峙	126
27.	波乱の道中	122
26.	竜の顎	117
25.	出会い	113
24.	戦姫の休養	108
竜の顎編		
23.	復興	104
22.	決着	99
21.	援軍	95

序章

1. プロローグ

暗く深い森の中、少女一人で道なき道を走っていた。

少女の体は酷く傷ついていたが、それでも必死に走り続けていた。

逃げなきゃ…もつと、遠くに……

頭ではそう考えているが、少女の限界はとうの昔に超えていた。

体中が悲鳴を上げ、ついに何もない所で足がもつれて転んでしま
う。

「うっ、うっ…」

立ちあがろうとするも力が入らず、体を起こすことも出来ない。

「……………いー…まえ、……………いじよ…… か!?!」

薄れゆく意識の中で少女は優しく凜々しい声を聞いた。

しかし、少女にはもはや返事をする体力すら残っていない。

その声の主が敵でないことを祈りながら少女は意識を手放した。

「……………ん……………あ、れ?」

目を覚ますと、目の前に広がるのは森ではなく見知らぬ天井だっ
た。

「……、は……………う?」

痛む体をいたわりながら体を起こすと、自分が寝ていたのはどこか
の医務室のベッドだった。いつの間にか怪我も綺麗に治療されてい
る。

「…一体誰が…」

別に誰かに向けたものでもなかった問いの答えはあっさりと目の前に現れた。

「目が覚めたか？」

そそに立っていたのは緋色の髪に鎧を身に纏った少女だった。

「え、えと……はい。お陰様で」

ペコリと一礼をしてそのままベッドから出ようとするが、その少女に引き止められる。

「まだじつとしておけ。ひどい怪我だったんだ。一体何があったんだ？」

「それは……」

「なんだい、もう目が覚めたのかい？なら、早く出ていきな」

どこか懐かしいような声が聞こえ、そちらに目を向けると、厳しそうな女性が立っていた。

「ポーリュシカ、流石にそれは……」

「見た目は酷かったけど命に別状はないよ。さあ、出てった出てった」

「グラン……ディーネ……？」

「……!？」

ポーリュシカの顔が一瞬にして驚愕に変わる。

「エルザ、悪いが少し外してくれるかい？」

エルザが出ていったことで病室に二人きりになり、少し気まずい雰囲気になった。思い空気の中でポーリュシカが口を開く。

「あんた、さっきの名どこで聞いた？」

「えと……私、グランディーネに天空の滅龍魔法教わったんです!!」

嘘偽りなく答えると、少し間を置いて「そうかい」とだけ呟いてすぐ近くの椅子に腰掛けた。

「私は確かにグランディーネだがあんたの知るのとは全くの別人。私

は「こじやない世界から来たのさ」

「そう…ですか…」

「……探してるのかい？グランディーネを」

「いえ、私はずっと前に彼女と別れてますから。ただ、ウエンディ…私の後に魔法を教わった子が今どうしてるか心配です」

当時のウエンディは、まだ魔力の操作も覚束無い女の子だった。そんな中、親代わりのグランディーネが居なくなってしまうたら彼女は一人ぼっちだ。そんな彼女を心配しないはずがなかった。

「なら、ギルドに入りな」

「……え？」

「ギルドならいろんな情報が入ってくる。お前を助けたエルザもギルドの魔導士だ。紹介して貰いな」

「私なんか…入っていいの…？」

「構わない。私は歓迎するぞ」

いつの間にか戻ってきていたエルザが優しく微笑みかける。

「……入りたい…。私、ギルドに入りたい!!」

「そうか。…えっと、名前は…」

「システイ…システイ・トワイライト!!」

「あれからもう三年かあ〜」

昔の事を振り返りながら私は空を仰ぐ。

未だにウエンディやグランディーネの情報は得られていないが、二人とも必ず生きていると信じているから今は特別心配していない。

そのまま空を見上げていると、肩に僅かな重みが加わる。

「システイ、確認終わったよ」

「ありがと、シエリル。じゃあ帰ろっか」

今では大切な相棒となった三毛猫のシエリルに笑いかけると、荷物を背負い大きく伸びをする。

私の立っている場所の周りには百を軽く超える人がボロボロになって倒れていた。

「それにしてもこいつら、全く歯ごたえが無かったよね〜」

「凄いのはシステイだよ。たった一人で闇ギルドを殲滅したんだから！」

「ギルドの支部がいっぱいあるって分かった時はホントめんどくさかったよねえ。結局いくつだっけ？」

「えつとね、…十四だね」

「そんなに潰したっけ？そりゃ長引く訳だ」

殲滅の依頼を受けてから既に一年が経っている。

心配はされてないと思うけど早く帰った方がよさそうだ。

「よしーじゃあ帰ろっか、妖精の尻尾に！」

2. オリ主設定

名前：システイ・トワイライト

ランク：S級魔導士

年齢：17歳

異名：妖精の戦姫^{ヴァルキリ}

使用する魔法：天空の滅竜魔法、付加魔法、支配のアーク、瞬間移動^{ダイレクトライ}

好きな物：ギルドのみんな、料理、昼寝

嫌いな物：家族を傷つけるもの、命を粗末にする人、睡眠妨害、乗り物全般

一人称：私

二人称：あなた あんた お前

性格

優しく気配りができるが、基本的に自分からは動かずに行く末を見守る。

魔力も多く実力もあり、ギルド最強と言われるほどの実力を持つ。しかし、全力を出すことは滅多にない。

仕事へは基本一人（シエリルはノーカウント）の為貯金が結構ある。過去に聖十大魔導に三度ほど誘われているが、自分にはもったいないか適当な理由で断っている。

仲間の為に身を投げ出すことを躊躇わず、そのせいで度々マスターからお叱りを受ける。

容姿

胸元まである銀色のストレートヘアに薄緑色の大きな瞳。

白のチュニックに赤と白のジャケットと短パン、黒いタイツに動きやすいショートブーツを履いている。

ある程度遠くへ仕事に行く時は薄茶色のフード付きケープを羽織っている。

ギルド内ではミラに次ぐ美人で、時間が合えば週刊ソーサリーで時々モデルをしている。

ギルドマークはナツと逆側の場所で色はピンク。

備考

天竜グランディーネに育てられた。

竜がいなくなるX777年7月7日時点で既に一人旅をしていた。

今はグランディーネと一緒に魔法の修行していた少女、ウエンデイ・マーベルを探して旅をしている。

過去に天空の滅竜魔法を狙う集団に捕まり実験を繰り返され、苦痛の末に支配のアークを習得し脱出。その逃走時にエルザに拾われ、そのままギルドに加入する。

それ以来エルザを慕っており、昔はよく一緒に仕事に行っていた。ギルド加入一年半後、S級昇格試験でギルダーツとラクサスと戦っており、両者ともに勝利してS級魔導士となった。

付加魔法は自他両方に掛けることができ、一度に大勢を対象に取ることが出来る

支配のアークは、生物（植物を覗く）以外なら魔力で支配できる。魔法も支配することができ、方向変更など可能。

魔法の場合、構造を解析して自分の魔法に昇華できる。ただし、^ロ失われた魔法は^{スト}不可^マ。^ジック^ク

魔力が足らないと支配できない。

相棒シエリル

三毛猫のエクシード（メス）

傷だらけで倒れているところに仕事帰りのシステイーが通りかかり、治療したことで仲良くなつて今では相棒になる。

3. 懐かしい面影

イシュガル大陸の西端に位置する永世中立国フィオーレ王国。その港町ハルジオンにシステイは立ち寄っていた。

「うう…まだ気持ち悪い…」

「大丈夫、システイ？」

道中で乗った電車のせいでシステイは気分を害していた。

滅竜魔導士はなぜか皆乗り物に弱い。酔い止めを飲もうが関係なく酔ってしまう。

まだ覚束ない足取りで街を彷徨っていると、不意に微かな魔法の気配を感じ取る。そして、それと同時に後ろから大勢の女性達がシステイを追い抜いていった。

「キヤーツ、サラマンダー火竜様よ〜!!」

「な、なに？今の……」

まるで嵐のように通り過ぎていった光景にシステイは思わず啞然とする。それに、女性達が叫んでいたことが凄く気になる。

「ねえシエリル、あの人達さつき火竜って言ってなかった？」

「言ってたね」

「ナツ…だよね？」

「多分……」

二人の間に微妙な空気が流れる。

女の子達にキヤーキヤー言われているナツなんて想像できない。とりあえず確かめてみるべく、システイは小走りで先を急いだ。

「キヤーツ!!火竜様〜!!」

「あそこか〜」

遠目で人だかりを見つけ、そこに向かって走っていく。そして、すぐ近くまで近寄ると今度は鮮明に魔法の気配を感じた。

危険レベルは低い。攻撃性もない。この魔法は……魅了?チャーム

人だかりの隙間から覗き込んで中心人物を確認すると、案の定ナツ

ではなかった。

「なんだ、なりすましか」

「みたいだね」

「どっかご飯でも行こっか、シエリル」

小さくため息をつくとき、システイは街の表通りの方に向けて歩き出した。

その時にはもうご飯のことしか考えていなかったため、システイは後ろで起こっている騒ぎに全く気付かなかった。



ハルジオンのとあるレストランにて、桜色の髪に銀色の鱗のようなマフラーをした少年ナツと青毛の猫ハッピーが、旅をしているというルーシイにご飯を奢ってもらっていた。

「あんふあ、ちよういひやつだね」

「あい！ありがと、ルーシイ」

「そんな急いで食べなくていいから。これはお礼なんだから」

もの凄い勢いで食べるナツにルーシイは苦笑いする。

「さっきのやつ、魅了って魔法使ってたの。それ、人の心を惹きつける魔法だね、もう何年前に発売禁止になったはずだったんだけど…。そこまでモテたいのかな？」

「…魔法詳しいんだな」

「こー見えてもあたし、魔導士なんだ。まだギルドには入ってないけどね。いや、入りたいギルドは決まってるんだけど、そのギルド有名だし凄い魔導士が一杯いるからさあ。あゝあ、入りたいけど厳しいんだろーなあ…」

「お、おう…」

「ルーシイってよく喋るね」

ルーシイのあまりの熱弁にナツ達は圧倒されていた。

「じゃ、あたしはそろそろ行くから。ゆっくり食べなさいよ」

ルーシイは立ち上がると食事代をテーブルの上に置いた。

それを見てナツとハッピーは互いに頷くとルーシイに向かって土下座をした。

「ご馳走様でした!!!」

「でした!!」

「キヤー!ちよ、ちよつとナツ、恥ずかしいからやめて〜!!」

そうやって店内で騒ぎたてる三人を、同じ店内から眺めている二人がいた。

「相変わらずだね…ナツは」

性格は全然変わっていないが、雰囲気から彼の成長を感じ、思わず笑みを溢すのだった。

4. 火竜と天竜

夜になり、システイ達がハルジオンの街を出てから三時間ほど経っていた。

「ナツ達元気そうだったね〜」

「そうだね。元気がすぎて面倒起こさなかったらいいんだけど…」

「ホントだよ…」

ドゴオオオン……!!

「……………」

後ろを振り返ると、巨大な客船が横転して陸に乗り上げていた。その上では度々爆炎が上がっている。そして、それに巻き込まれて沢山の民家が……。

「……ナツだね」

「そうだね…」

二人は同時にため息を漏らし、ハルジオンへ引き返した。

「まつじい。こんな炎ありえねえ」

「炎を…食べてる!?!」

ルーシイはナツの戦闘スタイルに驚いてばかりだった。

炎を纏って蹴ったり殴ったり。終いには炎を食べている。

「竜の肺は炎を吐き、竜の鱗は炎を溶かし、竜の爪は炎を纏う。これは、自らの体を竜の性質に変換させる古代の魔法。エンシエントスベル元々は竜迎撃用の魔法だけだね」

「食ったら力が湧いてきたあ!!」

ナツは拳を打ち鳴らし、魔法陣を展開する。そして、大きく息を吸い込み、魔力を乗せて勢いよく吐き出す。

「火竜の咆哮オ!!」

ナツから特大の火炎放射が放たれ、サラマンダー火竜と名乗っていたプロミネンスのボラが吹っ飛ばされる。

「す、凄い…。これが、フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士…」

圧倒的だった。

ボラの攻撃は当たらないし、そもそも当たっても効果はない。

それに対してナツの攻撃は何もかもを粉碎し吹き飛ばす。一撃一撃の威力が計り知れない。

「これで終わりだ!火竜の鉄拳!!」

「いっけー、ナツー!」

その場にいた誰もがもう決着がついたと思った。

実力の差は歴然で、ボラも空中に吹っ飛ばされていて防御できる体勢では無かった。

しかし、ナツの一撃は予想外の乱入者によって阻まれた。

「はい、そこまで」

「なっ!?!シ、システイ!?!」

ナツの一撃を片手で軽く受け止めているのはシエリルに抱えられて飛んでいるシステイだった。

「あくあ。システイ、街がめっちゃくちゃだよ」

「もうナツ、やり過ぎだよ。下の方も騒がしくなってきたよ」

気付けば街の軍隊が出動していて、ハッピーがルーシイを連れて飛んで来ていた。

「しかたないか。じゃあナツは罰として走ってもらう方針で、ハッピーはちゃんとその子を運んでね」

「ちよ、システイ!?!」

「あいー!」

システイはナツに有無を言わず容赦なく投げ捨てた。一応軍隊のいないところに投げる配慮はしてあげたが、振り切るのは大変だろ

う。

「え、あの、私…」

「なに？君、入りたいんでしょ、フェアリーテイル妖精の尻尾に」

「…!?はい!!」

ルーシイの返事を聞くとシステイは優しく微笑んで手を差し伸べた。

「私はシステイ・トワイライト。私はあなたを歓迎します」

二人と二匹の猫はそのまま飛翔し、一直線にギルドを目指した。

鉄の森編

5. 帰還

ナツとはちゃんと途中で合流し、三人と二匹揃ってマグノリアに帰ってきた。システイにとっては一年ぶりの帰還なので、懐かしい光景に胸を躍らせていた。

「帰ったぞー!!」

「あい！」

「ただいま〜」

ギルドの扉を開けると、懐かしい日常の光景が広がる。

ナツは帰って早々グレイに突っかかっているし、カナは相変わらず酒を樽で飲んでいる。

ギルドを見渡すことでシステイは改めて帰ってきたことを実感した。

「早かったわねナツ。システイは久しぶりね。一年ぶりかしら？」

出迎えてくれたのは妖精フェアリーテイルの尻尾の看板娘、ミラジエーン。

「そうだね。ただいま、ミラ姉。マスターは？新人希望なんですけど」

「は、はじめまして、ルーシイです！よろしくお願いします!!」

「はい、よろしくね」

手続きを終えてルーシイが正式に妖精の尻尾に入った直後、眼鏡を掛けた茶髪の男ロキがギルドに駆け込んできた。

「ナツ、グレイ！まずい。エルザが…エルザが帰ってきたぞ!!」

「な、なにい!？」

「へえ〜エル姉に会うのも久しぶりだな〜」

ロキの言葉にギルド全体が震える中、システイは一人だけ彼女の帰還を楽しみにしていた。

「あの、システイさん。エルザさんって誰ですか？」

「システイでいいよ、ルーシイ。エル姉はね、とっても強いんだよ」

「あい！ナツもグレイもボツコボコなんだよ」

「あのナツが!？」

「でもエルザよりシステイの方が強いんだよ」

「えええ!？」

ギルド全員がエルザの話で持ち切りの中、静かにギルドの扉が開かれる。

「今戻った」

入ってきたのはもちろんエルザだった。お土産として持って帰ってきた巨大な魔物の角が彼女の強さを証明している。

「ナツとグレイはいるか?」

「あい、こちらに」

ハッピーが指差す先には肩を組んで仲良さげにしているナツとグレイがいた。

「や、やあ…。今日も俺達な、仲良くやってるぜ:!!」

「あ、あい!」

「うむ、仲がいいのはいいことだ。

悪いがナツ、グレイ、頼みがある。力を貸してくれ」

「頼み?」

「へえ、なんか面白そうだね。エル姉、私も行っていい?」

「システイか。こちらとしてもお願いしたい。出発は明日だ、よろしく頼む」

そう言うと、ナツとグレイには有無を言わず話を切ってギルドを後にした。

ギルドは嵐が過ぎ去ったように静まり返り、誰もが状況についていけていなかった。

ナツ、グレイにエルザとシステイで結成された新設チーム。

いきなりの事で啞然とするルーシイの横でミラが小さく呟いた。

「今まで考えたこともなかったけど、これってもしかするとギルド最強チームかも……」

6. 列車内にて

「ううう…気持ち悪い…」

「おえええ…」

一同が列車に揺られる中、ナツとシステイは絶賛乗り物酔い中だった。

「ナツが乗り物に弱いのは知ってたけど、まさかシステイもだなんて…」

ルーシイが意外そうに呟く。

ルーシイはミラに頼まれてナツとグレイの仲介役として一緒に来ていた。

「滅竜魔導士は、乗り物に弱い…。シエリル、エルザの話聞いて…」

「分かった。システイも無理しないでね」

ナツとシステイがグロッキー状態の中、エルザが今回の詳細を話し始める。

「今回の目的はエリゴール、闇ギルドアイゼンヴァルト鉄の森のエースで『死神』と呼ばれる男だ。奴は『ララバイ』という魔法で何か企んでいるらしい」

「ララバイ…子守唄か」

「私はこの事態を看過することはできないと判断した。エリゴールを見つけ次第、ギルドごと殲滅する！」

「あたし、やっぱり帰ろうかな…」

ルーシイが後悔したように呟くが、列車は無情にも進み続けるのだった。

列車は目的地であるオニバス駅に到着し、一同は荷物をまとめて下車する。

「それで？これからどうすんだ？」

「まずは鉄の森の情報を探る」

「へえ〜…あれ？…そういえばナツ達は？」

その場にいるのはグレイ、エルザ、ルーシィと猫二匹。

つまり、列車に酔っていた二人を置き去りにしていた。しかも、二人を乗せた列車は既に出発している。

「くそっ!!二人のことを完全に忘れていた!!あの二人は乗り物に弱いと言うのに……」

「システイ……」

「とにかく、早く追いかけるぞ!!」

グレイはそう呼びかけ駅の外へ走っていく中、エルザは躊躇すること無く列車の緊急停止レバーを下ろすのだった。

まだエルザ達がシステイ達の不在に気づいていないころ、システイとナツはグロッキー状態で列車に揺られていた。

「うう……ナツ、大丈夫？」

「おええ…気持ち悪い……」

二人とももう限界が近かった。

そんな中、一人の男が近づいてくる。

「お二人方、ここ空いてる？」

「ああ、はい……。どうぞ……」

限界で答え出来ないナツの代わりにシステイが対応する。

しかし、男は座ることなくナツの右腕のシンボルマークに目をやる。

「へえ、あんたら妖精の尻尾、^{フェアリーテイル}正規ギルドかあ。いいねえ、羨ましいねえ」

そう言つてナツを魔法で吹き飛ばす。

「ナツ!? 貴方、何のつもり!!」

「あれ? お嬢さん、もしかして妖精の戦姫?^{ヴァルキリー}可愛いねえ〜そんなギルド辞めてうちのギルドに入らない？」

「うるさい……」

「正規ギルドだからって偉そうに。てめえらなんてハエだよハエ」
「黙れ!!」

システイは両手に風を纏わせるが、乗り物酔いのせいで上手く制御出来ない。

「やつぱり、ハエはハエ、だな」

しかし、次の瞬間に列車はなぜか急ブレーキを掛けた。

「うおっ!？」

「…!?止まった!!」

列車は完全に停車し、続いて車内放送が流れる。

『ただいま緊急停止レバーが下ろされましたので、事態の確認がとれるまで一時停車します』

「よくわからないけど、列車が止まればこっちのものよ!!……ん?」

気づけばさっきの急ブレーキのせいで男は転倒し、懐から三つ目の髑髏の笛が転がり落ちていた。

「随分と趣味の悪い笛ね。禍々しい魔力を感じるわ」

「…!?み、見たな!？」

男は距離を取り、今度はその笛を啜える。どうやら今からそれを吹くようだ。

しかし、また流れてきた車内放送を聞いて今度は戦っている場合ではなくなつた。

『大変お待たせ致しました。先ほどの警報は誤報と判明致しましたので間もなく運転を再開します』

「やば…。ナツ、下りるよ!!」

列車が再び動き始めたら二人とも力が入らなくなってしまった。

ナツとシステイは列車が再び動き出す直前に急いで飛び下りるのだった。

7. 死神エリゴール

システイとナツが列車から飛び降りてから少しして、魔導四輪車に乗ったエルザ達が追いついてきた。

魔導四輪車は運転手の魔力を消費して走る車だ。相当飛ばしたのか、エルザには少し疲れが見えた。

「すまないナツ、システイ。とにかく、無事でよかった」

ゴツン!!

「痛えー!!」

エルザの手で胸元へ頭を抱きしめられるナツだったが、エルザは鎧を着用しているため、鈍い音が響き渡る。

エルザはシステイも抱きしめようとしたが、システイは全力で断つた。

「あ、そういえば列車で変な人に絡まれてさあ」

魔道四輪車に乗り込む直前でシステイが思い出したように口を開く。

「ああ、何か変な笛みたいなの持ってたな。それが気味悪い笛でよお、三つ目の髑髏の笛なんだ」

「三つ目の…髑髏?」

不意にルーシイがどこか引つかかったように呟いた。

「笛…髑髏…ララバイ…子守唄……」

あ!!そうよ、それがララバイよ!!呪歌、**“死”**の魔法!!」

「何!?それは本当か!？」

エルザからの問いにルーシイは頷くと、思い出したララバイの情報を語り出した。

ララバイは大昔にいたと言われている黒魔導士**“ゼレフ”**が作り

出した魔笛。そして、その笛の音を聴いた者全てを呪殺する。

それが集団呪殺魔法 “ララバイ”。

「集団呪殺魔法…だと!？」

「あの笛がララバイ…」

「とにかく、今はあの列車を追う。お前達も早く乗れ!!」

全員が速やかに乗車すると、エルザは魔力を惜しまず全力全開でぶっ飛ばす。

「ちよ、ちよつとエル姉、うぷつ…」

速度に伴って揺れもこれでもかというほど激しく、いつもより八割増の乗り物酔いがシステイとナツを襲う。

「お、おえ…。もう、下ろして、くれえ…」

ナツも限界を超え、飛び降りても降りようとするナツをルーシイが全力で引き止めている。

そんな地獄のような時間を耐え抜き、一同は目的の駅、オシバナ駅に到着した。

状況は最悪。駅には入場を規制するように軍隊の人達が立っており、中は闇ギルドによって占拠されているとの事だった。

「君、中の状況は!？」

「な、なんだね君たちは!？」

「遅い！早く答えんか!!」

ゴツン!!

「ちよつと!!」

突然のことで回答に戸惑っていた軍の人にエルザは理不尽に頭突きを喰らわす。

「エルザって結構メチャクチャなのね…」

「そだね…。エル姉は昔からあんなだよ」

結局エルザは勝手に規制を無視して駅構内に入り込んだ。

そして、目の前に広がる光景に全員絶句する。

「そんな…」

「軍が…全滅してる…!?!」

軍隊の小隊は全員ボロボロで、呻き声をあげながら倒れていた。傷の具合を見ると、特に命に関わる大怪我をしている人はいないので、システイは魔力温存のために回復魔法を掛けず放置しておいた。

そのまま一同は駅の奥へと進みホームに足を踏み入れると、そこには数十人の集団が待ち構えていた。そしてその中の一人、大きな鎌を持った男がシステイ達の前に進み出る。

「よう。待ってたぜ、妖精の尻尾のハエども」

「貴様がエリゴールか!! 一体そのララバイで何をやる気だ!?!」

エルザが一步前に出てエリゴールに向けて声をあげるが、エリゴールは気圧されることなくシステイ達を見下ろす。遥か上空から。

「あいつ…浮いてる…!?!」

「風の魔法だね、あれは」

「クククツ、分からねえか?ここは駅だ。駅には何があると思う?」

エリゴールは不気味な笑みを浮かべながら駅に設置されたスピーカーをコンコンと叩く。

「まさか!?!」

「ああ。これは肅正。死神が与える『死』という名の罰だ!!」

「そんなこと、我々がさせると思うか?」

「ハエは大人しく潰されてな。」

「てめえら、俺は笛を吹きに行く。後は任せるぞ」

そう言うと、エリゴールは天井近くの窓を割って、隣のブロックへ姿を消した。

「あ、逃げんのかこらあ!?!」

「クソツ!!」

「チツ…ナツ、グレイ!ここは任せて二人で奴を追え!」

エルザの指示にナツとグレイは互いに顔を見合わせて唾み合う。

「なんでこいつと!俺一人で十分だ。グレイは引っ込んでろ」

「ああ!?なにほざいてんだ。てめえが引つ込め」

「さっさと行け!!」

「あいー!!」

痺れを切らしたエルザが二人に怒鳴りあげると、二人は瞬時に肩を組んで走っていった。

「何なの、あの二人は…」

「さて、私達はさっさとここを片付けてナツたちを追うぞ」

「だね。ちゃんとしてきてよ、エル姉」

この瞬間、妖精の尻尾最強と謳われる妖精の女王テイターニアと妖精の戦姫ヴァルキリーの二人による殲滅戦が幕を開けた。

8. 妖精の舞う戦場

「悪いが時間が無い。最初から全力でいく」

エルザは魔法剣を出現させ、その切っ先を鉄の森アイゼンヴァルトの連中に向けた。それが合図となり、戦闘が始まった。

「ちよつとシステイ、流石にエルザ一人じゃ…」

「大丈夫だよ、エル姉は」

「そんなこと言ってる場合じゃ…」

しかし、ルーシイの心配は完全に杞憂だ。

エルザは緋色の髪を靡かせながら敵を次々と薙ぎ払う。

そして、槍や双剣に斧と武器を素早く入れ替えている。

「クソツ…この女、なんて速度で〃換装〃するんだ…!?!」

「〃換装〃?」

「魔法剣はルーシイの星霊魔法に似てて、別空間にストックされている武器を呼び出すって原理なんだ。で、その時に〃持ち替える〃ってことを〃換装〃って言うんだよ」

「へえ〜凄いなあ……」

「ただ、エル姉の換装は武器だけには収まらないよ」

ハッピーの説明に隣からシステイが付け足す。

「エル姉の換装は自身の能力を高める〃魔法の鎧〃も換装しながら戦うんだ。それがエル姉の魔法、〃騎士ザ・ナイト〃」

「換装、〃天輪の鎧〃!!舞え、剣たちよ」

エルザがそう唱えると出現した剣たちが踊るように回り、敵を切り刻む。

「天輪!!〃循環サークルの剣〃!!!」

「!!!〃ぐあああああつ!!!〃!!!」

「容赦ないね…。さて、そろそろ私も行きますか」

エルザのお陰で敵の総数は半分を下回っている。ここで一気に方付ける。

「エル姉、いくよ。天竜のお…旋風せんぷう!!」

システイは超巨大な竜巻を起こし、敵を遥か上空吹き飛ばす。そして、空中に投げ出された彼らはシステイの魔法を回避できない。

「天竜のお…咆哮オ!!」

システイの口から放たれた強烈な突風は鎌鼬のような鋭さを持ち、体を切り刻んでいく。

「す、す…」

半分近く残っていたはずの敵はシステイの魔法によって全滅。ルーシイの出番なく戦いは終了した。

「ルーシイ、早く活躍しないと猫のオイラたちと同じ扱いだよ」

「エルザ達と比べたらあたしなんてそんなもんよ…」

「ルーシイ、さっきの突風に隠れて逃げた奴がいた。もしや、エリゴールの下へ向かうかもしれん。追ってくれ!!」

「あ、はい!!」

ルーシイは急いで残党の逃げた方へ走っていく。システイはついでにハッピーとシエリルもルーシイに同行させた。

ルーシイ達が見えなくなるとシステイは一息つき、エルザに肩を貸す。

「全く…。あれだけ魔導四輪車を飛ばしたのに魔力使いすぎ。もうほとんど残ってないでしょ?」

システイは魔力切れで顔を青くしているエルザに自身の魔力を流し込む。

「すまない。私はいいから、早く、外の奴らの避難を…」

「大丈夫、まだ時間はあるはずよ。もし、ララバイをスピーカーで流す気ならもうとつくにしているはず。なのにそうならないってことは、目的は別にあるはずよ」

『ハエにしてはやるじゃねえか』

「エリゴール!」

「エル姉、あれは思念体だよ」

『テメエの言う通り、本来の目的は別だ。俺はこのままクローバーの街へ向かう。止めたきや止めてみな。もつとも、そこから出られた

ら、だがな』

そう言い残すと、エリゴールの思念体は消滅した。

「クローバーの街…そこに何があるっていうの…?」

「待て、確かクローバーの街ではマスター達の定例会が…。まさか、奴の狙いはギルドマスターか!？」

「エルザ、システイ!!」

振り返ると大したものではないが、傷を負った 그레이 が飛び込んできた。

「 그레이、無事だったか」

「ああ。だがそれどころじゃねえ。エルザ、システイちよつと来てくれ」

그레이 に連れられて駅を出ると、駅の周りには大きな竜巻に包まれていた。しかも、中から外へ出られないように風が吹いていて、下手に突っ込めば体を挟られそうな威力だ。

「ん…よし。 그레이、この魔風壁は任せてナツとルーシー連れてきてくれる?」

「わかった」

「システイ、やれるのか?」

「何言ってるの。私は天竜の滅竜魔導士だよ」

そう言うと、システイは魔風壁を食べ始めた。滅竜魔導士は自身の属性の魔法を喰らい、己の力にできる。天空の滅竜魔導士にとってそれは空気、つまり風も食べることができる。

魔風壁なんて格好の餌食だったが、ここで一つ問題が生じた。

「これ、食べきれないな…。食べても食べても周りの空気を使って大きさを維持してる…」

「システイでも手に負えんか…」

「連れてきたぞー」

ここで 그레이 が二人と二匹を連れてきて全員が合流する。ナツが先走って突っ込もうとするが、何とか引き止めて落ち着かせる。

「さて、全員揃ったことだし、こんな壁はぶっ壊してやりますか」

正直、システイは魔風壁を食い切れるとは考えてなかった。ただ、ぶち破るための魔力を得ていたのだ。

「天竜の風は全てを貫く。天竜の圧穿^{あっせん}!!」

両手から放たれた竜巻は魔風壁に大きな穴を開け、一同はそこから魔風壁を脱した。

「よし、出られた」

「流石だぜ、システイ」

後ろを振り返ると、さつき通った風穴が閉じていく。システイ達全員が脱出した今、あの魔風壁は鉄の森を捕らえる檻と化した訳だ。

「あれ？そういえばナツは？」

「ハッピーもいねえぞ」

「全く、世話の焼ける奴だ。私達も先を急ぐぞ」

「おう!!」

「うん!!」

エルザの指示で一同はまたもや魔導四輪車でクローバーの街へと出発した。

その後ろで密かにシステイの作った穴から脱出していた一人の男が気味悪く笑っていた。

9. 三つ目の悪魔

「う、うぷっ……気持ち悪い……」

「すまんシステイ……。だが今は気遣っておれん」

「ああ揺れる……。気持ち悪い……」

エルザはすまなそうに言うが、今のシステイの耳には入ってこない。ただただ自分のことで一杯一杯だった。

エルザは先を急ぐあまり一直線にクローバーの街を目指しているため、道無き道を突き進み、車体は激しく揺らされる。システイにとってはかつて経験したことないほどの地獄だった。

地獄のような時間がどれほど続いたのか、ようやく先行していたナツに追いついた。

勝敗は既に決しており、ナツの足元でエリゴールは気絶していた。

「おう！遅かったな、みんな」

「エリゴールを倒したのか。ナツ、よくやった」

「楽勝だったぜ」

「その割にボロボロだな」

「んだとゴルフ!!」

「やんのか!?!」

そんな調子でワイワイしている中、システイだけ何か嫌な予感がしていた。どこかこのままでは終わらない気が。

「っ!?!ハッピー、後ろ!!」

システイが気づいた時にはもう遅かった。

いつの間になっていたのか、エリゴールの部下の一人がハッピーからララバイを奪い取り、システイ達が乗ってきた魔導四輪車も奪って走り去っていく。

「ハハハッ!!ララバイは頂いて行くぜえ」

「しまった!!」

「不味い、早く奴を追うぞ!!」

エルザの指示とともにシステイ達は急いでクローバーの街に向かった。

そして数十分後、定例会場近くにある森の中で逃げた男と我らがマスター、マカロフを見つけた。

エルザ達が急いで止めにはいるうとするのが、寸でのところで止められる。

「しっ！今いいところなんだから、黙って見てなさい」

「あ、あなたは…！」

ブルーベガサス
「青い天馬のマスターあー!!」

「あらー、エルザちゃんにシステイちゃんじゃない!!二人ともすごく綺麗になつちやつてー…いいわねえ！」

「…何なの？この人」

ルーシイがシステイに呆れた口調で尋ねる。

「あれでも青い天馬のマスターのボブだよ」

「へ、へえ…」

「どうした？早くせんか」

突然現れた青い天馬のマスターに忘れていたが、マカロフの声が聞こえ、目的を思い出す。

「い、いかん！」

慌ててエルザが止めに入ろうとするが、またもや止められる。

「静かに見てろ」

今度はサングラスをかけた男、クワトロケルベロス四つ首の猟犬のマスター、ゴールドマインだった。

よく見るとゴールドマインの後ろにも定例会に出ていたギルドマスターがおり、マカロフの様子を伺っていた。

辺りに少し静けさが戻った今、マカロフの言葉が鮮明に響き渡る。

「何も変わらんよ…」

「っ!？」

「弱い人間はいつまで経っても弱いまま…。しかし弱さの全てが悪で

はない…。

元々、人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安になる。だから、ギルドがある、仲間がいる。強く生きるため、寄り添いあって歩いていく。

不器用な者は人より多くの壁にぶつかるとし、遠回りをするやもしれん…。しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。

強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても…な」

「……参りました…」

マカロフの言葉が胸に響いたのか、男はすつとララバイを手放し、俯いて涙を流した。

事が解決するとエルザ達が一斉にマカロフの下へ駆け寄っていく。

「マスター!!」

「じっちゃん!!」

「じーさん!!」

「ぬお!?お、お主ら、何故ここに!?!」

突然現れたエルザ達にマカロフは驚愕する。

「流石です!マスターのお言葉、胸が熱くなりました!!」

ガッツ!

「いたあい!!」

感動のあまりエルザは勢いよくマカロフを抱きしめるが、マカロフは鎧に頭を打ち付け、鈍い音が響く。

「じっちゃんすっげえなあー!」

ナツはマカロフの頭を叩きながらそう言う。

「すごいと思うのなら頭を叩くでないわ!!」

「これで一件落着だな!」

「そうね!」

「あい!!」

グレイやルーシィ達がお互いに顔を見合わせ、笑みを浮かべ喜んでいるなか、システイは冷静に周囲を見る。

「……まだだよ」

システイの目線の先には地面に転がったララバイ。

ギロツ!!とララバイの目が怪しく光ったと思うと笛がいきなり喋り出す。

『カカカツ どいつもこいつも情けねえ魔導士共だ…!!もう我慢出来ん…。我が自ら、喰らってやろう………!!貴様らの、魂をなアアアツ!!!』

するとララバイは巨大な怪物へと姿を変えた。

「な……こ、これは……!?!」

「ゼレフ書の悪魔……」

「本性を現しやがったな」

ナツが叫び、システイはマカロフとアイコンタクトを取る。

「一体どうなっているの……?」

ルーシイが戸惑いの声を上げる。

「ララバイとはつまり、あの怪物そのものの事を言うのさ。ララバイ……生きた魔法……。それが、ゼレフ書の悪魔さ」

答えたのはゴールドマイン。

「ゼレフだど!?ゼレフって確か大昔の……」

「そう。黒魔導士ゼレフ、魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士……」

そして……今もどこかで……

『さあて、どいつの魂から頂こうか……。いや……全員まとめて喰ってやる!!』

ララバイの言葉に慌てるギルドマスター達だが、マカロフは余裕の笑みを浮かべる。

「行くぞ!!」

「おおっ!!」

そして、エルザ、グレイ、ナツの三人が動き出す。システイはギルドマスター達の護衛としてその場に残るが、しつかり三人をサポートする。

「いくよ、三人とも!!イルバーニア、イルアームズ」

システイの付加魔法により移動速度、攻撃力をともに倍加させる。

「換装、天輪の鎧!!」

その声と共に鎧を変え、複数の武器を手にはララバイを斬り裂くエルザ。

「うおりゃあ!!火竜の鉄拳」

エルザに続きナツがララバイの体をよじ登ると、その顔面を炎でぶち殴る。

「何じゃ、あれは?!あれも魔法なのか!」

鬱陶しく感じたララバイがナツとエルザに向け攻撃を出すのが、イルバーニアによって加速した二人はいとも容易く避け続ける。

時折流れ弾がギルドマスター達の元に飛んでくるが、待ち構えていたグレイが魔法で防ぐ。

「アイスメイク……………シールド盾!!」

ギイイイインツ!!!

グレイの魔法は瞬時に氷の盾を作り出し、ギルドマスター達の身を守る。

「おお、一瞬でこれだけの造形魔法を!!」

「造形魔法?」

「魔力に〃形〃を与える魔法だよ。そして、形を奪う魔法でもある…」

ハッピーの言葉に思わずルーシーは息を呑む。

「アイスメイク……………ランス槍騎士!!」

今度はグレイの魔法がララバイの下半身を吹き飛ばす。

「す、すごい!!」

「流石だねえみんな。さて、私もそろそろ行こうかな」

ルーシーが感嘆の声を上げるなか、遂にシステイも動き出す。

「天竜の牙は空をも切り裂く…。天竜の碎牙!!」

システイの腕から放たれる牙にも似た風はララバイの両腕に突き刺さり切断する。

下半身も両腕も無くなったララバイにはもう抵抗する手段はない。

「決めるよ!!天竜のお……………あっせん圧穿!!」

竜巻はララバイを貫通し、やがて静かに塵となって消滅した。

「かーかつかつか!!どーじや、凄いじゃろー!!」

マカロフの甲高い笑い声が一同を現実に取り戻し、全身で喜びを顕にする。

「すっごーい!!」

「これが妖精の尻尾最強チームフェアリーテイルか」

「見たか!!これが俺たち妖精の尻尾だあ!!」

「……………あ」

突然、システイがなにかに気付いたような声を漏らす。

「む?システイ、どうかした…か…」

システイの視線の先には本来あるはずの定例会の会場が消え去っていた。

結局、この後システイ達はショックのあまり気絶したマカロフを抱え、逃げるようにギルドへと帰還した。

悪魔の島編

10. 火竜VS妖精の女王

いつの間にかこんな話になっていたのか、ギルドに帰って早々エルザ対ナツの決闘が行われようとしていた。

「ねえ、ホントにやるの〜?」

「あつたりめえだあ!!エルザ、全力でやれよ!!」

「無論だ。まだまだ負ける理由にはいかんのでな」

そう言うと、エルザは「炎帝の鎧」に換装する。

「うっわ、火属性耐性の炎帝の鎧ってエル姉ガチだね…」

「全力でかかってこい!!」

遂にナツとエルザの決闘が幕を開ける。

先に動いたのはもちろんナツ。体に炎を纏い蹴りやパンチを放つがエルザには当たらない。しかし、エルザの攻撃もナツには当たらない。

二人の攻防を通して、エルザはナツの成長を身を以て感じていた。

「やるな、ナツ」

「へっ、まだまだこれからだぜ!!」

二人の拳と刀が何度もぶつかり合う。本気の二人の戦いを目の前にして、観戦するみんなのテンションもドンドン上がっていく。

誰もが興奮する二人の戦いは永遠にも続くように思えたが、その終わりは誰もが予期しない形で訪れた。

パアアアアンツ!!

「そこまで」

大きな音とともに現れた一人の（一匹の?）カエル。それはナツとエルザの前に進み出る。

「全員その場を動くな。私は評議会の使者である」

「評議会!?!」

「なんでそんな奴がここに？」

その場が段々とざわつき始める。

評議会からの使者はその様子を気に止めることはなく、持っていた文書を読み上げ始める。

「先日の鉄アイゼンヴァルトの森テロ事件において、器物損害罪他十一件の罪において、エルザ・スカーレット、並びにシステイ・トワイライトの両名を逮捕する」

「ちよつと、何よそれ!? 定例会の会場を壊したのは私なんだから私だけではないじゃない!!」

「騒ぐな。この件は既に評議会で決定済みだ。大人しく投降しろ」
「くっ……」

結局、システイの抵抗は聞き入れられず二人とも逮捕され、評議会に連れていかれた。

評議会に連れてこられた時は、一体どんな罪を受けるのか内心心配だった。懲役刑はいやだなあだとか、面倒な仕事が押し付けられるだけですめばいいなあとか考えていた。

しかし、エルザは分からないが、システイに関しては牢屋にぶち込まれることも無かった。

「さて、システイ・トワイライト。ここに呼んだのは他でもない。貴殿の各地での活躍は我々の耳にも届いておる」

「は、はあ……」

評議会の議長直々の言葉にシステイは戸惑いを覚える。

「今回の件についても尽力してくれたと聞いておる。そこでじゃ、我々はそれを評価し、貴殿に『聖十大魔道』の称号を授けたい」

「いや、受け取れません!! 私にはそこまでの実力はありませんから」
「そうか……。なら、貴殿が本当の強さを手に入れた時に渡すでしょう」

議長はシステイの心を見透かしたように言うのと、すぐに引き下がってくれた。だけど、それが逆に不気味だった。

その後、ナツが評議会に乱入してくると言うハプニングがあったものの、元々形式だけだったエルザの裁判も終わり、翌日には三人揃っ

てギルドに戻ってきた。

ギルドに戻ってきて早々エルザとシステイはメンバーから質問攻めにあつたがシステイはあまり語らず、聖十大魔道に関しては隠しておくことにした。幸い、知っているのはあそこにいた評議会の人としてステイだけだ。

ただ、マカロフにだけは打ち明けて置くことにした。

「マスター、少しいいですか?」

「ん?…ああ、構わんぞ」

「どうかしたんですか?」

「いや……、眠い」

マカロフがそう呟くと、入口に近い者から順にバタバタと倒れていく。システイにも眠気が襲ってくるが、魔力を高めて意識を保つ。

「久しぶりだね、ミストガン」

「ああ。久しいな、システイ」

ミストガンはシステイの頭を軽く撫でるとクエストボードから一つを手にしてマカロフに手渡す。

「この仕事を受ける」

「次はどのくらいかかるの?」

「分からない。最近アニマの出現周期が短くなっている」

「そう…。あまり無理しないでね」

「お互いな」

ミストガンは少しからかうように言うと、すぐに扉の方へ歩き始めた。

「これ！眠りの魔法を解かんか!!」

伍……………四……………参……………弍……………壹……………零

ミストガンがギルドを出た瞬間、ナツ以外のメンバーが目覚めます。

「今の魔法…ミストガンか!？」

「相変わらずすげえ眠りの魔法だな…」

「んうー…なにい?今の…」

「ミストガンだよ」

「…ミストガン?」

眠そうに目を擦るルーシイの疑問にシステイは答える。

「このギルドの最強格の一人だよ」

「え、そうなの!？」

システイの言葉に驚き、ルーシイは眠気を忘れて声をあげる。

「でも誰も顔を見たことがないのよね…」

ミラは苦笑を浮かべながら残念そうに言う。

「いんや、俺は見たことあるぜ」

しかし、突然ギルドの2階から男の声が響く。

全員が驚き、声のした方に顔を向けると、そこには金髪でヘッドフォンをした男が立っていた。

「ラクサス!？」

「…帰ってきてたんだ」

「俺やジジイだけじゃねえ…。システイもミストガンを知っているぞ。なあ?システイ…」

ラクサスはそう言い、システイに向けて不敵な笑みを向ける。

「前から甘えとは思ってたが甘すぎだ。俺はな、俺より強えテメエが腑抜けてやがるのが一番気に食わねえんだよ」

「そろそろウザいよ、ラクサス」

「…不味いな」

「な、何が?」

「システイがイラつき始めた。アイツが怒る前に止めないと後が厄介だ」

システイとラクサスの両者は魔力を徐々に高め合い、一触即発の空気が漂う。

「これ、よさんか全く。お主らは…ギルドを壊す気か?」

「流石にそこまではしないよ。ただ、少し身の程を知ってもらおうと思ってるだけ」

マカロフの言葉に笑みを浮かべるシステイの耳に、突然「ラクサスー!!」と、叫ぶナツの声が届く。

今まで眠りこけてたはずのナツはラクサスに向けて全力で叫ぶ。

「ラクサスー！俺と勝負しろ!!」

「ナツ……………」

ナツの言葉に呆れを見せるシステイ。

「はっ…やりたきやここまで上がってこいよ。なあナツ?」

「上等だアア!!行つてやらア!!」

ラクサスの挑発を受けて階段を駆け上がろうとするが、マカロフの巨大な拳が一段すら上らせなかった。

「二階に行つてはいかん、まだな」

「ははっ！止められてやんの!!」

「ラクサス！お主も挑発は止めんか!!」

「はっ！いいか、これだけは言っておくぜ。妖精の尻尾最強はこの俺だ。システイ、いつか必ずテメエを倒す」

ラクサスはそう言つて高笑いを響かせながら二階の奥へと姿を消した。

ラクサスとの一悶着でざわついていたギルドだが徐々にいつもの様子を取り戻し始めていた。

ふと、先ほどのマカロフの言葉が気になったルーシイはミラに声をかける。

「あの…ミラさん…さっきマスターが二階に行つてはダメだつて…」

「ああ、あれね？二階には一階に貼られてある依頼とは比べものにならないくらい難しいS級クエストが貼られているの。その依頼に行けるのはギルドの中でもマスターに認められた実力のあるS級魔導士だけ。その中にはエルザ、ミストガン、ラクサスそれにシステイも入ってるわ」

「えーそーなんですか!?!」

ルーシイは驚いた表情でシステイに視線を送る。

話を聞いていたシステイはルーシイの視線に苦笑いする。

「まあ…確かに私も二階に行けるよ。そういや最近行ってないし、覗いてみようかな」

いつの間にか一悶着あつたギルドの雰囲気はいつもの感じに戻っていた。しかし、そのせいで一人と一匹の悪巧みに誰も気づかなかつた。

11. S級クエスト

ラクサスの一件の後、ギルドの二階にあるS級クエストのボードを眺めながらシステイはシエリルと悩んでいた。

「システイ、どれにするの？」

「うくん、別にお金には困ってないからなあ…」

「ならこれは？報酬に黄道十二門の鍵だよ」

「へえ、いいね。じゃあそれにしようか」

報酬金は大して高くはないが、世界にたった十二本しかない星霊の鍵が貰えるのは嬉しい。何ならルーシイにお土産としてあげてもいい。何らかの対価はいただくけど。

クエストボードから依頼書を外し、システイとシエリルは相変わらず騒がしい一階に下りる。すると、丁度マカロフがカウンターで寛いでいるのが見えたので、この間の聖十大魔道の件について話しておこうと思い、マカロフの隣に座った。

「マスター、この間の評議会でのことなんだけど…」

そう切り出し、システイはマカロフにあったこと全てを話した。

システイが話し終わると、「フム…」と呟いて少し残念そうな顔をした。

「システイ、お前さんはもう十分に強い。それはワシも、ギルドのみんなも認めとることじゃ。そろそろ自分に自信を持って」

「でも、やっぱり私は…」

「そういう不器用なところはエルザにそっくりじゃな…」

その後もマカロフとすっかり話し込んでしまい、システイは危うく本来の目的を忘れるところだった。

「あ、マスター。私、この仕事…ってあれ？」

気づけば置いてあったはずのS級クエストの依頼書が無くなって

いた。辺りを見渡してもどこにも見当たらない。

「どうしたんじや、システイ？」

「二階から依頼書取って来たんだけど、気づいたら無くなって…」

「そこにあつた紙切れなら、青猫が取ってつたぞ」

「ラクサス!!」

声の方を向くと、ラクサスが二階から見下ろしていた。

「青猫ってハッピーのことでしょ？何で止めなかったの!？」

「俺には何の紙か分かんなかったんでな。それよりジジイ、ナツはギルドの掟を破った。もちろん破門、だよなあ？」

ラクサスの言葉に対してギルド全体がマカロフの答えを待つ。

ナツがギルドの掟を破ったことは確かな事実だ。最悪の場合、ラクサスの言う通り破門だつて有り得る。

「マスター、これはちゃんと見てなかった私の責任です。私が連れ戻してきます」

「……頼まれてくれるか？」

「はい。依頼は私名義で受けておいて下さい。相手側に迷惑は掛けられませんから」

「待て、システイ。私も行く」

そう言い出したのはエルザだった。

エルザはギルドの風紀委員と言えるほどに掟に厳しい。行くと言い出すのも当然だろう。

「エル姉…。うん、お願いするね」

私が気まぐれでS級クエストを受けようなんて思わなければ…

システイはその後悔せずにはいられない。

最後に「行つてきます」とだけ告げ、システイとエルザは依頼のあつた悪魔の島、ガルナ島に向かった。

12. 上陸、悪魔の島

ハルジオンに着いた二人は、早速ガルナ島行の船を探すが、搜索は難航していた。

「うくん…まさかガルナ島までの船が無いなんてねえ…」

船乗りたちはガルナ島の呪いを恐れ、今ではその付近の航路さえ通る船はないらしい。

「どうしようエル姉…っであれ？」

気づけばさつきまで隣にいたエルザの姿が消えていた。

辺りを見渡してみると、エルザの特徴的な緋色の髪は港町から浮いていて、すぐに見つけることが出来た。しかし、エルザの後ろに広がる光景に思わず絶句した。

「……え……」

エルザは密かに港に停泊していた海賊船に乗り込み、船員たちを殲滅していた。

「えっと…何やってるの…?」

「ああ、心優しい奴らがいてな、交渉をしたら乗せてくれるそうだ」

エルザは近寄ってきたシステイに笑みを見せるが、エルザの手には涙を流すボロボロの船長の姿があった。

「へ、へえ…それは良かった…ね?」

結局、エルザの交渉脅しの末、ガルナ島まで運んでくれる事になった。

「あ、あんたら一体あの島に何の用なんだ?あの島は、みんな怖がって誰も近づかねえってのに!」

舵を切っていた船長は震える声でシステイ達に問いかけるが、返ってきたのは言葉ではなく殺気だった。

「つべこべ言わず、貴様は黙って船を操縦している」

「ヒイ!!わ、分かりましたっ…!」

首筋に剣先を突き付けられ、船長は震えながら舵を握る。

誰もこの状況を止めることはできない。船員は元より話にならず、

システイの場合は乗り物酔いでダウンしている。

「う、うぶっ……死にそう……」

方や殺気を放つ恐ろしい少女、方や乗り物酔いでグロッキーな少女。そんなシユールな光景が海賊船上で繰り広げられていた。

暫く船を進め、ようやくガルナ島に到着した。

「ここが呪いの島か」

「うん……」

乗り物酔いから回復したシステイは頷くとガルナ島を照らす月を見上げた。

「紫色の月……か」

辺りを照らす紫色の月光は島の不気味さを増幅させている。それに、月から確かに魔力を感じる。恐らくあの紫色は何らかの魔法の影響なのだろう。

「あの月、島の呪いと関係ありそうだね」

「同感だ」

とりあえず二人は島の海岸線にそって歩き始めた。

しばらく歩くと、悲鳴とともに何か大きな物が落ちたような音が聞こえた。

「っ！エル姉!!」

「ああ!!」

二人は一気に足を早めると、大きなネズミと、今にもネズミに潰されてしまいそうなルーシイが目に入った。

「天竜の咆哮っ!!」

システイは威力より距離を優先して咆哮を放ったが、風はネズミの大きな体を軽々と吹き飛ばした。

「シ、システイ!?!」

ルーシイは予期せぬ援軍に驚いたがすぐに表情に笑みが浮かぶ。

「システイ、来てくれたんだ……!!」

「来たのは私だけじゃないけどね……」

「え……?」

システイはそう言うのと、吹き飛ばしたネズミに視線を向ける。ネズミは今にも起き上がろうとしているが、それが許されるはずが無い。

ズサササツ!!!

いつの間にか天輪の鎧に換装したエルザの攻撃によってネズミは戦闘不能となった。

「エルザ!!!」

システイに加えてエルザの登場に笑みを浮かべるルーシイだったが、すぐに二人が来た理由を悟り、顔を青くしていく。

「ルーシイも来てたんだ…。ねえ、ナツは？一緒じゃないの？」

「ナツは分からない。グレイは怪我しちゃって…」

「見かけないと思ったらグレイもかあ……………」

ルーシイの言葉にシステイは頭を抱える。

今は静かだが、エルザも相当怒っているだろう。いつの間にかルーシイを追ってきていたハッピーもこの場において、既にエルザの手に捕まっていた。

「とにかく状況を確認したい。とりあえずグレイのところへ連れて行って…」

「わ…分かった……………」

ルーシイに連れられてシステイ達が着いたところは、大きく森が開けたところだった。ルーシイの話では、少し前にさっきのネズミの落とした謎のゼリーに村を溶かされてしまったらしい。

システイ達は負傷して眠っているグレイがいるテントの中に入った。

システイは眠るグレイの傍に腰を下ろすと巻かれた包帯を外して怪我の具合をみる。

「…これならちよつと深いけどすぐ治せるよ」

「そうか……頼めるか？」

システイは無言で頷くと 그레이の傷口に両手を当てた。

「え、治すって？」

「ルーシイはまだ見たことなかったよね。システイは回復魔法が使えるんだよ」

「へえ〜」

ルーシイはじつとシステイの手を見つめる。

그레이に触れるシステイの手から淡い銀色の光が輝き、次第にその輝きは 그레이の傷口を塞いでいく。そして、銀色の輝きが消える頃には苦しげだった 그레이の呼吸や表情は幾分か穏やかになり、傷口も完全に塞がっていた。

「よし。とりあえずはこれで大丈夫。流石に流れた血は回復できないけど、傷はもう大丈夫だよ。後は目覚めるのを待つだけ」

そう言い、システイはエルザたちの方を振り返る。

「わあ！良かった…」

「あい！」

「流石だな…システイ」

エルザたちはシステイの言葉に安堵し笑顔を浮かべた。

「ねえルーシイ、この島で何が起こってるの？」

村の人曰く、どうやらナツは一人で島の中心部にある遺跡に向かったらしいが、すぐに追いかけてようとするエルザを引き止め、システイは状況確認のためルーシイに問い掛けた。

「この島の異変…それは全部、月のせいなの」

そう言つてルーシイは厄災の悪魔^{ムーンドリット}アリオラ、月の雫、そして主犯であるリオンと 그레이の関係について語った。

ルーシイの話聞き、システイは空の月を見上げる。ルーシイの話も聞いても疑問は解消されない。

「おかしいよ」

「え…?」

「月が紫色になるなんて、有り得ない」

「でも、現に月は…」

「もし！月が紫色になってるなら他の場所からでも紫色に見えるはずだよ。でも、ここからしかそう見えないってことは…」

「この島に原因がある、ということか。だが、今日はもう遅い。明日にはナツを見つけて、グレイが目を覚まし次第ギルドに連れて帰る」

エルザの言葉に一同は一度解散し、村人が用意してくれたテントに入って一夜を過ごすことになった。

その夜、システイは隣で眠るシエリルを起こさないようにテントを出ると、散歩がてら海岸に向かった。

海を眺めると、海面に紫色に光る月が映っている。システイは近くの岩の上に座ると、空に浮かぶ月を見上げた。

「眠れないのか、システイ?」

「…エル姉」

システイはチラリと後ろを振り返ると、再び空に視線を向けた。

「なんか気になっちゃってね…」

「あの月のことか…」

エルザの言葉に小さく頷く。

「…あのさ、エル姉。お願いがあるんだけど聞いてくれる?」

突然話し始めたシステイにエルザは視線を向けるが、何も言わずに先を促す。

「私の代わりにナツ達を見守ってくれないかな?」

「…?!まさかシステイ、ギルドを…」

「辞めないよ。ただ、そろそろ探しに行こうと思ってる」

「ああ、確かウエンディだったか?」

「うん。私にとっては妹みたいな女の子だよ。大体目星は付いてきて

るんだ」

エルザはシステイの瞳に強い想いを感じ取った。決して曲がらない信念のような思いを。

エルザはため息をつくとき、苦笑を浮かべてシステイを見た。

「分かった。……だが、ちゃんと無事に帰ってくるのだぞ」

「うん、わかってる。エル姉、ナツ達を頼むね」

「お前の頼みだから……。さて、そろそろ休もう。明日に響くぞ」

「あ、うん………」

先に行くエルザの後に続いてシステイも立ち上がる。

最後に紫に光る月を眺め、海岸を後にした。

13. 決断

システイとエルザが島についた翌朝、ようやくグレイが目を覚ました。

「……っ……、ここは……？」

「起きたか、グレイ」

まだ痛む身体をゆっくりと起こしたグレイの視界には気を失う前はいなかったシステイとエルザの姿があった。

「システイ!?それにエルザも……!!」

「……大体の話はルーシイから聞いたよ。分かってる?これはギルドの掟に反することだよ?」

システイの言葉に何も言い返せずにグレイは顔を俯く。

「はあ……呆れてものも言えんぞ」

「っ……ナ、ナツは?」

「ナツはここにはいないわ……。多分どこかで迷子になってるか、もしかしたら遺跡にいるのかも」

グレイの質問に答えたルーシイを見て、グレイは「そうか……」と俯く。

「とにかく、ナツを見つけ次第お前達を連れ私はギルドへ戻る」

エルザのその言葉を聞き、グレイは有り得ないとも言おうような顔をエルザに向ける。

「な……ギルドに帰るって……お前!この島で何が起きているのかルーシイから聞いたんだらう!?なら……!!」

「ああ聞いたさ。だがそれがどうした?私の目的はギルドの掟を破つた者を連れ戻すこと。ただそれだけだ。」

あとはナツを見つけ次第、私達は戻る。それ以外の目的などない」

エルザの言葉を聞き、グレイはエルザをきつく睨みつける。その表情は険しく、どこか苦しげだ。

「この島の人たちの姿を見たんじやねえのかよ!？」

「見たが？」

「それを放っておけというのか!？」

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理したギルドの魔導士たちに任せるのが筋というものだろう?。」

口論は完全に二人でヒートアップしているが、システイはなぜエルザがシステイがその依頼を受けたことを言わないのか不思議だった。

そうこうしているうちにグレイは我慢の限界を超えたのか、拳を強く握り締める。

「……………見損なつたぞ、テメエ…!!」

「…なんだと?。」

グレイの言葉を聞き、ルーシイ達を気にせず殺気を放ったエルザだが、グレイはそれに怖気付くこと無く立ち向かう。

「見損なつたのはこちらの方だ。現に貴様は掟を破つてここにいる」

確かにギルドのルールを破つたナツやルーシイ、グレイに非があるのは変わらぬ事実だ。グレイもそんなことは百も承知だ。

「ただではすまさんぞ」

そう言いきり、エルザはグレイの首元に剣先を向ける。

「ちよーエルザっ!!」

「システイ!!」

二人のやりとりを見ていたルーシイとシエリルはエルザの行動に慌てる。しかし、システイはただじつと二人を見守っていた。

剣を向けられたグレイは引くどころかエルザの剣を握りしめ、押し返す。

「勝手にしやがれ!!これは、俺が選んだ道なんだよ!!やらなきやならねえ事があるんだ」

そう言い、グレイは剣を握る手を強める。その手からは血が滴り始め、テントの床を赤い斑点が出来る。

エルザはグレイの引き下がらないと言った決意の見える瞳を暫く

見つめ、一時の沈黙の後エルザははあと一つため息をついた。
そして、グレイに剣を離させるとルーシイとハッピーを縛っていた
縄を切った。

「…ええ?」

「エルザ…?」

こればかりはグレイも驚いたのか、グレイは気の抜けた声を出す。
エルザはグレイを振り返り、呆れた顔で言う。

「これでは話にならない。…まずは仕事を片付けてからだ」

「え…で、でも他のギルドがこの依頼を受けてたら問題になっちゃう
んじゃない…?」

先ほどの他のギルドに任せろと言ったエルザの言葉を覚えていた
ルーシイは恐る恐ると言った様子でエルザに問う。しかし、答えたの
は今まで黙っていたシステイだった。

「この依頼、もう私が受けてるから他のギルドが受けるなんてことは
絶対がないよ」

まるで今までの雰囲気をぶち壊すようなヘラリとした口調でシス
テイは言い切った。

「…ええ!?!」

「エル姉も意地悪だよねえ。ま、私もみんなに手伝って貰うつもり
だったけど」

システイのからかうような視線を受けたエルザはフツと笑い、シス
テイを見返すエルザ。

「初めから許可しては反省せんだろう。それに、私はこいつの想いを
聞きたかったのな…。少々試させてもらったんだ」

二人の会話を聞き、ルーシイ達は呆然とその光景を見つめる。

「え…じ、じゃあ最初から連れ戻す気はなかった…ってこと…?」

確認のため問いかけてくるルーシイにエルザは呆れた顔をする。

「バカなことを言うな。私は初めからお前達を連れ戻す気だった。だ
が、お前達の成長を見るいい機会だと思って仕方なくだ」

そう言いながらエルザはチラリとシステイに視線を送る。それは

システイにすっかり見定めろとでもいうような瞳だった。

恐らくエルザはこの依頼を通して、ナツ達は心配するほど弱くないことを示したいのだろう。

「ホント、エル姉は変なところでお人好しなんだから…」

クスクスと笑いながら、システイは誰にも聞こえないくらいの大きさで呟いた。

「さてと、…グレイ？手出して」

「ん？あ、ああ…」

グレイはすぐにシステイの意図を察し、傷ついた手を差し出す。システイはその手を優しく握り、回復魔法でその傷を治す。傷はすぐに塞がり、グレイはギュツ、ギュツと感触を確かめるように手を握る。

「……うしー！サンキュー、システイ」

「グレイ、分かっているとと思うけど、あんまり無茶するとすぐ傷が開いちやうから無理はしないように。」

……あと、これだけは覚えておいて。貴方が今何を思い、何に悩んで、何に苦しんでいるのか私は知らない。けど、あなたにはみんなが…仲間がいる。それだけは、忘れないで」

そう言うシステイの顔は何故か悲しげだった。

グレイはじつとその顔を見つめ、「…分かった」とだけ返した。

その答えを聞くと、システイは優しく微笑んでエルザの方へ向き直った。

「それじゃあエル姉、…そろそろあのバカを探しに行きますか…！」

「ああ…そうだな…」

システイの笑みに釣られてエルザも笑みを浮かべる。

「よし、……行くぞー！」

「」「」「おおー！！」「」

エルザの掛け声と共にテントを飛び出し、システイ達は問題の遺跡へと足を進めた。

14. 災厄の悪魔、デリオラ

村を出たシステイ達は遺跡に向かう途中で、グレイから敵の情報と目的を再度聞いていた。

「なるほど…。つまりその零帝リオンはかつてお前の師匠でもあったウルが命をかけて封印した怪物、デリオラの封印を解き、自身の手でそれを破壊…。そして、師を超えることを望んでいるのか…」

「ああ」

簡潔に纏めたエルザの言葉に頷くと、グレイは足を止めることなく遺跡を睨みつける。

「確かに…ウルは俺達の前からいなくなつた……。けど、ウルはまだ生きてるんだ」

グレイの話を聞き、システイ達は自然と走る足を速める。

そしてふと遺跡を見つめると、ルーシイは遺跡に違和感を感じた。

「あれ？遺跡が傾いてる…？」

「恐らくナツだろう…」

↑ドリック

「なるほど…あれなら月の雫はデリオラのいる地下まで届かないね」
相変わらずこういう時だけ頭が回るんだからと、システイは心の奥で愚痴りながら足を進めると、突然目の前を仮面をつけた民族の集団が現れ、道を塞いだ。

「っ…くそ…こっちは急いでるっつうのに!!」

目の前に立ち塞がった集団にグレイは愚痴を吐く。

その横でシステイも小さく舌打ちをし、強引に突破しようと魔力を拳に溜めた時、急にエルザが前に出た。

「行け…ここは任せろ。グレイ、お前はリオンと決着をつけてこい!!」

小さく背後を振り返ったエルザの瞳には、負ける疑いなど一切なかった。

「っ!!サンキュー!エルザ!!」

エルザに礼を言うとその横を通り、遺跡へと走るグレイ。

「システイ、お前も行け。ナツ達の成長を見届けてこい!!」

「うん、わかった!!シエリル、お願いね」

システイはシエリルに掴まると、一直線に遺跡を目指した。

遺跡の中へ入ると、システイはそのまま地下への道を走っていく。

「多分こっちの方からナツの匂いがきてるんだけど…」

竜同等の嗅覚でナツの居場所を探すが、崩れて風通りが良くなったからか、匂いが薄くなっている。

「どう、システイ?追えそう?」

「んー……………この辺だとは思うんだけど…」

薄い匂いを辿ってきたが、そろそろ限界だった。これ以上は薄すぎて追い用がない。

しかし、運良く探し人の方から来てくれた。

「待てやゴラあああああっ!!」

「ナツ!!」

走ってきたナツは変な仮面をつけた小さな老人を追っていた。

「お?システイ!?!丁度いい。そいつ捕まえてくれ!!」

「…そいつ?」

ナツの追う老人は狭い通路を細やかに逃げている。老人とは思えない素早さだ。それに、システイはその老人とどこかで会った事があるような気がしていた。

「あ、システイ!ナツ見失っちゃうわよ!!」

「んえ?あ、うん分かってる」

あの雰囲気…一体誰だっけ…

システイは記憶を巡らせながらナツと共に追跡を始めた。

老人を追う中、システイはナツの隣に並んで老人を指差す。

「ナツ：アレ誰？」

「俺が知るかよ!!けど、あいつの魔法で折角傾けた遺跡が元に戻ったんだ!!」

「遺跡が…!?!」

今さらながら、システイは自分の走る通路が傾いていないことに気がついた。

だが、ものを元の形に戻すなんてできる魔法は、ロストマジック「失われた魔法」でもただ一つ。時空の魔法、”時のアーク”しか有り得ない。そして、システイはそれが使える魔導士を一人しか知らない。

「やっぱり……………」

「ん？システイ、どーかしたか？」

「ううん、何でもない…。それより早く追わないと」

しかし、追っている仮面の老人が一瞬にして目の前から姿を消した。

「えっ!?!」

「消えた!?!」

「もしかして…。ナツ、デリオラの所に急ぐよ!!」

急いで地下へと掛け降りると、システイの予想通り仮面の老人は地下深くのデリオラの前にいた。

「見つけた!!」

「火竜の鉄拳っ!!」

氷に覆われたデリオラを見上げ、ニヤニヤと笑っている仮面の老人に向けてナツは火を纏った拳を放つ。しかし、ナツの拳はひよいつと軽い様子で避けられてしまう。

「ほっほー。よくここがお分かりになりましたね？」

「俺達は鼻がいいんだよ!!」

「それに、貴方の匂いにはどこか覚えがある」

システイは鋭い視線を向けるが、老人は怖気づくことなく笑い続ける。

「ほっほっほっ…私はね、どうしてもデリオラを復活させねばなりませんのよ…」

「へっ…やめとけやめとけ!もう無理だ」

ナツは笑う仮面の老人にニヤツと笑みを見せ言い切る。

「グレイがあいつをぶっ飛ばす!!そして、俺がお前をぶっ飛ばす!!それで終わりだこの野郎!!」

「ちよつとナツ、私もいるんだからね」

システイは呆れ顔をナツに向ける。

「ほっほっほっ、そう上手くいきますかな?」

すると突然デリオラの氷に紫の光、〃月の雫〃が降り注いできた。

「なに!?上で儀式してる奴がいんのか!?」

ナツは月の雫が降り注ぐ天上を見上げ、顔をしかめる。

「ほっほっほっ。たった1人では月の雫の効果は弱いのですが、既に十分な月の光が集まっております。あとはきっかけさえ与えてしまえば…」

仮面の老人がそう呟いた時、ピシツと乾いた音が氷から響いた。

「っ!」

「氷に亀裂が…」

「くそ!上にいる奴を何とかしねえと…!!」

そう叫び、来た道に戻ろうとするナツだが、その道を仮面の老人が天上の岩を落として塞ぐ。

「んなっ!」

「逃がしませんぞ…。お二人にはここに残って貰います」

「くっ…それなら…。システイ!!」

システイはナツの目を見て考えていることを察し、二人同時に息を吸い込んだ。

「っ!?ま、まさか…」

「火竜の…」

「天竜の…」

「咆哮オ!!」

放たれた火炎と竜巻は入り交じり、より強力な炎の渦となって天井を貫いた。

ユニゾンレイド
合体魔法。本当に息が合った者同士でなければ発動は難しく、生涯を費やしても習得には至らないと言われるほどの高難度魔法。

だが、システイがナツに合わせることで二つの魔法が真に一つとなり、より強力な魔法となった。

ドドドドゴオオオオン
!!!!!!

地下最深部から放たれた火炎の竜巻は勢いそのまま地上の遥か空まで貫いた。

竜巻が消えると、儀式の光は消え月の雫も消滅した。

システイとナツは互いに顔を見合わせ安堵する。

しかし、安心するのはまだ早かった。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

まるで地鳴りのような雄叫びが響き渡った。

「うわあ!」

「な、なんだ!」

「え…う、そ…!?」

システイ、ナツ、シエリルの目に映るは大きな雄叫びをあげ、氷から完全に解放されたデリオラの姿だった。

「そんな…復活してる…」

「驚いてる暇はねえ!行くぞシステイ!!」

「待て!!お前からどうにか叶う相手じゃねえ!!!」

突然割って入ってきたのはグレイの声だった。

グレイは先程ナツとシステイが開けた穴から降りてきて、デリオラ

の前に立ち塞がった。そして、不意にグレイはある構えをとる。

永久氷結魔法、絶対氷結アイストシエルの構えを。

「な…グレイ!? やめなさい!!!」

「絶対氷結!!!」

グレイはシステイの言葉を聞かず、その呪文を唱える。

すると、その呪文と共にグレイの周りに膨大な魔力が集まり始める。

その光景を見たりオンは堪らず声を上げる。

「よ、よせグレイ!! あの水を溶かすのにどれだけの時間がかかったと思ってるんだ!」

「うるせえ!! 俺が今、こいつを止める…!!」

グレイは更に魔力を高め、標準をデリオラへと合わせる。しかし、それを阻むようにシステイとナツは立ち塞がる。

システイはゆっくりと歩み寄り、グレイの目の前へと辿り着く。

「どけ、システイ!! それ以上近づくとお前まで凍っちゃう!!」

実際、システイの体は徐々に凍り始めていた。

しかし、システイはそのことが気にならないほど激怒していた。

「……『邪魔』」

バシイーン!!!

「なっ…!?!」

誰も何が起こったのか理解できなかった。

さつきまで発動寸前だったはずの絶対氷結が一瞬にして霧散したのだ。さつきまでの冷気が嘘のように消えている。

「ねえ、私言ったよね? なのに何で一人で抱え込もうとするの?」

貴方にはみんながいる。仲間がいる。家族がいるじゃない!!」

「…あの時、死んで欲しくねえから止めたのに、俺の声は届かなかったのか…?」

「っ!? ナツ……」

デリオラを見上げるナツの隣にシステイも並ぶ。

「こいつがいつまでもグレイを苦しめるなら、私達はその傷を癒して

みせる」

「っ!!無茶だ…やめろおおおっ!!!」

ナツとシステイがほぼ同時に地面を蹴り、デリオラに向けて飛び出したその時――

ピシ、ピシピシ、ガラガラガラッ!!

「っ!?!なんだア!?!」

突然、デリオラに亀裂が入り、拳から全身が崩れ落ちていく。

デリオラは既に死んでいた。ウルの氷の中で徐々に命を削られ、既にその命を終わらせていたのだ。

「すっげえ…すっげえな!!お前の師匠!!」

崩れ落ちたデリオラの残骸を見つめると、ナツは背後で俯いていたグレイを振り返り、満面の笑みを見せる。

グレイは俯き、目元を手で覆っていた。

「ありがとうございます…ございます…師匠…」

「よかったね、グレイ…」

これでグレイの暗い闇は消え去った。

海に溶けて帰っていくウルの氷と共に流されるかのように、グレイを苦しめていた長年の闇が涙となって流れ落ちた。

15. 真実

「みんな！無事だったのね！」

システイ達が遺跡から出ると、外ではルーシイとエルザが待っていた。

「そっちも大丈夫そうだよかったよ」

「よっしゃ、終わったー!!!」

ナツが両手を空に掲げ、満面の笑みで叫ぶ。

「これで俺達もS級クエスト達成だー!!」

「だー!!」

ナツの叫ぶ姿を真似てハッピーも飛び上がり、一緒に喜んでいる。

「もしかしてあたし達二階に行けちゃうのかな!？」

ルーシイもルーシイで、クエスト達成に喜びの声を上げている。だが、忘れてはいけないのは、ナツたちは掟を破ってここにいることだ。

「ちよつと三人とも、そんな訳ないでしょ？帰ったらお仕置きだからね。もつとも、今から既にお仕置きだけど」

そう言っ指差したシステイの先には背後に修羅を背負ったエルザがナツ達を睨んでいた。それはもう恐ろしい程に…。

「ひい!？」

「そ、そうだ…お仕置きが待ってたんだ…」

「…その前に、やるべき事があるだろう?」

しかし、エルザはその場でナツ達を叱ることはなく、まだクエストは達成していないことを言ってきた。

「…え?」

「『悪魔にされた村人を救うこと』…それが今回の依頼の内容でしょ?」

「で、でも…デリオラは死んじゃったし…村の呪いもこれで…」

「いや、あの呪いとか言う現象はデリオラの影響ではない。月の雫の膨大な魔力が人々に害を及ぼしたのだ。つまり、デリオラが崩壊した

からと言って事態は改善しない」

ルーシイの疑問にエルザが答える。

エルザの答えに、「そんなあ…」とルーシイは目に見えて落胆する。ふと、では月の雫の儀式をしていた張本人、リオンならば何か知っているのでは？という意見が出て、グレイがリオンを見やるが、リオンは何も知らないと言い切った。

「なんだとお!？」

ナツはリオンを睨みつける。

リオンはナツに視線をやり、ため息をつくと淡々と話し出す。

「三年前、この島に俺達が来た時、俺達は村が存在するのは知っていたが村の人達には干渉しなかった。彼らから逆に会いに来ることもなかったしな」

リオンの言葉にシステイがピクツと眉を寄せる。

「…三年間、一度も？ずっと島にいたのに？」

「何が言いたい？」

「どうしたの、システイ？」

「…もしかしたら……………」

システイの言葉にハツとエルザも気づいた。

「貴様ら…何故三年間もあの光を浴びながら悪魔の姿になっていないんだ…？」

「…「あっ!!」「…」」

エルザの言葉にナツ以外のメンバーがようやく気づき、リオンを見張る。

「……………気をつけろ、奴らは何か隠している」

リオン達と別れ、一同が村に戻ってくると、消されたはずの村が元通りになっていた。

「えっ?…直ってる?」

「ど、どーなってんだ…?」

ナツ達はその光景に目を見張り、驚愕する。

だが、システイは誰がやったのか確信していた。

……一体、どうして……ウルティア……

システイはこの場にいない彼女に心の中で問い掛ける。

もちろん答えが返って来るはずもなく、空には依然紫色の月が浮かんでいる。

「おーーい!!システイ!何してんだ?!!」

遠くから、システイを呼ぶナツの声が聞こえてくる。もはや何かとんでもないことをしでかしそうな気配しかない。

「で?どうしたの、ナツ?」

「今から月ぶつ壊すからシステイにも手伝ってほしいんだ」

「ふくん月を……月!?!」

「システイが常識人でよかった」

何故かルーシイが抱きついてくるが、システイはそれどころじゃない。

「ねえ、ホントに壊すの?」

「ああ、無論だ」

エルザの言葉にシステイは思わず頭を抱える。

「エルザが言うのと現実味が出ちゃうんだよなあ。」

「それで?私は何を手伝うの?」

エルザの作戦としては、まずシステイの付与魔法で全員を強化ひ、エルザが巨人の鎧と破邪の槍のコンボで槍を投擲。最後にナツの鉄拳とシステイの咆哮でブーストをかけて月の破壊を試みるというものだった。

「行つくぞオオ!!」

「今だ、ナツ!!!」

「うおおおっ!!!火竜の鉄拳!!」

タイミングは完璧。エルザが破邪の槍を投げるその瞬間に合わせ、ナツの拳が当たる。それが一次加速。そして、続いて二次加速。

「天竜の…咆哮オ!!」

風の後押しも得た破邪の槍は、速度が衰えることなく突き進んで行く。そして、槍はドンドン小さくなっていき、空中で何かに突き刺さった。

ビシイッ!!!

「うそおおおおお!!?」

月にヒビが入ったように見えたが、実際にエルザの槍が壊したのは島の上空を覆っていた月の雫の光によりできた呪いの膜だった。

それには村人達の脳や記憶を狂わせてしまう効力があり、そのせいで村人達は長年苦しんでいたのだ。

つまり、月の光のせいで悪魔化したのではなく、光のせいで記憶が狂っていたのだった。

これにて一件落着。依頼は無事達成された。

翌日、依頼の報酬をシステイに差し出すが、そのシステイが一切受け取らないため村長も困っていた。

「それではこの報酬は受け取れぬと……?」

「はい。この依頼は最初不当で受けられた依頼でした。……なので、報酬金は頂けません。村の復興などにでも当ててください」

そうやってシステイは報酬金の受け取りを拒んだ。

結局、最後まで諦めなかった村長の押しに負け、おまけの報酬である金の鍵のみ受け取ることにして、一行はエルザとシステイが行きに使った海賊船でマグノリアへと帰還するのであった……………。

幽鬼の支配者編

16. 幽鬼の奇襲

海賊船に乗り、マグノリアの港へと帰還したシステイ達。

いつも通り、乗り物酔いの余韻が残るナツとシステイに苦笑を浮かべながら一同はギルドへ帰る途中だった。

「システイ、いつごろ旅に出るつもりなんだ？」

ナツ達に聞こえないよう気遣いながらエルザはシステイに問いかける

「そんなにすぐって訳じゃないから安心して、エル姉。一応この一件が終わって落ち着いたら行くつもり」

「そうか…」

「人馬!?それってどんな奴なんだ？」

深刻な雰囲気です話し込むシステイとエルザを他所に、ナツ達は貰った黄道十二門の鍵を持って騒いでいた。

そんな光景を見て、システイは思わずため息をついてしまう。何だか真面目な話をしている自分の方が馬鹿みたいだ。

「ナツ、ルーシイ。その鍵あげたのは私だけど…：…いいの?そんなに呑気にしてて」

「え?」

「だって帰ったらアレだよ?」

システイは隣のエルザへ視線を向ける。

「…ギルドへ戻ったら、お前達の処分を決定する」

エルザは普段と変わらず、途轍もない量の荷物を引きながら、ナツ達に無表情でそう告げる。

その言葉を聞いた瞬間、ナツ達は思い出したように震える。

「ま、判断を下すのはマスターだけだね。一応覚悟はしといた方がいい

いよっ。」

お仕置きを受けるナツ達を想像してか、ニヤニヤし始めるシステイを見て、ナツとグレイは背筋に嫌な寒気が走る。

「ま、まさか…アレをやらされるんじゃない?！」

「え、アレって?」

「アレだけは嫌だよおっ!!」

「だからアレって何?」

グレイやハッピーが恐怖に震え、それを見たルーシイも訳もわからず恐怖する。

「へ、大丈夫だって!!きつとじっちゃんならよくやったって褒めてくれるさ!!」

唯一、ナツだけは気落ちせずポジティブ思考を貫いている。

「あんた…どんだけポジティブなのよ…」

その様子にルーシイが呆れた目で見つめ、システイも苦笑を浮かべ、ナツを見る。

しかし……

「いや…アレは确实だろう」

エルザの無慈悲な声が響く。

すると、さつきまで笑顔だったナツの顔から次第に滝のような汗が流れ、恐怖で顔が歪む。

「嫌だあああああっ!!!」

「アレだけはっ!!アレだけはっ!!絶対嫌だあああああああっ!!!」

「だからアレって…何なのよおおおお?」

ナツとルーシイが絶叫し、逃げ出そうとするナツをエルザが首根っこを掴んで、引きずられるようにしてギルドへと歩を進める。

「あはは…。流石に自業自得だよ、ナツ」

流石に助けられないと苦笑を浮かべ、エルザとのやり取りを見ていたシステイは、ふと周囲の視線がおかしいことに気づいた。

「…ねえ？なんか見られてない？」

「ん？ああ、確かに…」

システイの言葉にエルザも頷き、ナツ達も周囲へと意識を回す。

「なんだア？」

「なんか…嫌な感じね？」

ナツとルーシーが怪訝そうな表情で言い、グレイやハッピーもそれに頷く。

「またギルドのみんなが何かしちやっただのかな？」

「しちやっただとしたらあたしたちだと思っただけだなあ…」

周囲の目を気にしながら、ギルドへと真っ直ぐ帰ると、次第にその姿が見えてくる。

そして、ギルド全体を目にすることでその理由が判明した。

「んな…!？」

「んだこりゃあ!？」

「ひ、ひどい…」

「ギルドがボロボロだあ…」

「これは…!？」

「…!？この魔力って…!？」

システイ達の目の前には、何本もの鉄の柱が壁に突き刺さり、ボロボロになったギルドがあつた。

ナツやグレイは口々に怒りを顔にし、エルザも拳を握って震わせている。

「何があつたというのだ…」

「…ファントム」

システイ達の背後から、弱々しいが聞き覚えのある声が聞こえ、振り返ると悲しく悔しげな表情を浮かべたミラが俯き、立っていた。

「ファントム…だと？」

「悔しいけど、やられちゃったの…」

その名を聞き、ナツは更に表情を歪ませ、システイは笑顔のないミラの頭を撫で、抱きしめる。そして、ミラに案内されてギルドの地下の仮酒場に向かった。

そこではギルドメンバーが神妙な面持ちで集まっており、しーんと普段では考えられないほど静まり返っていた。

すると、システイ達の帰還に気づいたマカロフが酒を片手に手を上げた。

「よっ！おかえり！」

「マスター…！」

マカロフの呼びかけにシステイ達はすぐにその傍へと駆け寄る。

「ただいま…戻りました」

「じっちゃん!!酒なんか飲んでる場合じゃねえだろ!？」

ナツの怒声が響く。しかし、マカロフは一瞬真剣な表情になると、「おおそうじゃった！お前達!!勝手にS級クエスト何ぞに行きおつてからに!!」

何故かギルド建物のことではなく、ナツ達が勝手にS級クエストへ行ってしまったことへの怒りが落ちた。

「え!？」

「はア!？」

マカロフの言葉に、驚きの声を上げるルーシイとグレイ。

「罰じゃ!!今からお前達に罰を与える!!覚悟せいっ!!」

マカロフからの「罰」の言葉に、ナツ達はビク!と震え、身構える。だが、結局はルーシイを除いた者は頭に一発チョップをくらいい、ルーシイはお尻を叩かれるという、いわゆる「セクハラ」で終わった。

そんなマカロフの様子にエルザは唾然とし、ほんの僅かに怒りを覚えたのか、テーブルをバンツ!!と叩き、マカロフへ鋭い目を向ける。

「マスター!!今がどんな事態か分かっているのですか!？」

「ギルドを壊されたんだぞ?!じっちゃん!!」

エルザとナツの怒声を聞くも、マカロフは平然としており、怒るのではなく二人を宥め始めた。

「まあまあ落ち着きい。騒ぐほどのことでもなからうに。フロントムだア？誰もいないギルドを狙って何が嬉しいのやら…」

「誰も…いない？」

マカロフの言葉にシステイが首を傾げ、ミラを見やる。

ミラもシステイの視線を感じ、頷く。

「ええ…。幸いにもやられたのは夜中で誰もいなかったから怪我人はいないのよ」

「へえ…」

夜中に一体何の目的で…

「不意打ちしかできんような奴らに目くじら立てる必要はねえ…。放っておけ!!」

マカロフはその言葉と共に、この話は終わりじゃ!と叫び、その後ナツ達からの抗議の声も一切聞かず、酒を飲み続けた。

そしてその後、仮酒場にはマカロフとシステイのみが残っていた。

「マスター…どういうおつもりなんですか？」

「なんじゃ…。さつき言ったじゃろ？」

別にガキどもは誰も傷ついておらん。建物は、みなで力を合わせればまた作り直せる…。騒ぐほどのことじゃあねえ……。

そうじゃろ？」

「……でも、今回は、どこか普段と様子が違う気がするんです…」

システイのその言葉にマカロフはピクツと眉を動かし、システイを見つめる。

「……下手な詮索はよすのじゃ。これ以上、向こうが何もしてこねえなら何も言うことはないじゃろ…」

何を言っても気持ちは変わらないと言うマカロフにため息をつき、システイは仮酒場を後にする。

「確かに、ギルド間での争いは禁じられている…。それがマスターのお心なら、私はそれに従いますよ」

そして、扉を開け出ていく間際…

「…でも、もし誰かの血が流れるようであれば、私は『一人の魔導士』としてでもやるつもりですから」

そう呟き、では…と、システイはその場を立ち去った。

去っていったその後を見つめ、マカロフは長いため息をつくのだった…。

ギルドを出たシステイはその足でルーシイの家へと向かっていた。暫くは一人で行くのは危ないということで、今夜は全員誰かと一緒に過ごしている。

システイとシェリルもまた、ナツやエルザに誘われていた為、ルーシイの家へと向かっているのだ。

コンコンコンツ

「ルーシイ、来たよー」

バタバタバタツ!!! ガチャ

「システイ、シェリル、いらつしやい!!はあく良かった!!システイが常識人でほんつと良かった!!」

ただノックしたただけなのに…と、システイは訳が分からないと言うような顔をする。

「ま、とりあえず中に入って入って!!」

ルーシイに押されるがままにシステイは部屋の中へと入る。

ルーシイの部屋の中では、ナツが未だに唸っていた。

「くつそー!じつちちゃんもミラもみんなビビってんだよ!!」

「だから、ちげえだろ…」

「マスターも我慢しているんだ…。ギルドを壊され、一番悔しいのはマスターだろう」

騒ぎ暴れるナツをグレイとエルザが宥めている。

その様子を見つめ、ハッピーとシエリルはため息をついており、ルーシイとたった今来たシステイは苦笑を浮かべた。

「それにしても…ファントム？って酷いことするのね…前にもこんなことあったの？」

話を変えようとルーシイはシステイ達に問いかける。

「んー？いや、確かに今まで小さな小競り合いはあったけど…」

「こういうことは初めてよね」

システイとシエリルの言葉にそうなんだ…と頷くルーシイ。

「んがー！やっぱ納得いかねえ!!じっちゃんもビビってないでやり返せばいいだろ!？」

先に手出されたのはこっちなんだぞ!？」

「だーから！そういう問題じゃないでしょ!?!それに、マスターもビビってる訳じゃないわよ…」

再び叫び声をあげるナツを宥めるシステイ。

「システイの言う通りだろ…仮にもじーさんは聖十大魔道の一人なんだぞ?。」

「…聖十大魔道？グレイ、聖十大魔道って?。」

グレイの言ったその単語に聞き覚えのないルーシイは首を傾げて問いかける。

「聖十大魔道と言うのは魔法評議会議長が定めた、大陸で最も優れた魔導士十人につけられる称号のことだ」

「ちなみにファントムのマスター、ジョゼもその一人よ」

エルザとシステイの説明に、ルーシイはへえと興味を示す。

「ちなみに、システイはこの間聖十大魔道に招待されてたわよ」

「え、そうなの!？」

「はあ？システイ、聞いてねえぞ!!」

シエリルからの突然の告白にルーシイだけでなくナツ達も驚きの目でシステイを見つめる。

「ちよつと、それは言わなくていいでしょ!？」

えつと…まあ…確かに今まで何度か声は掛けられてるんだけど…。

私にはまだ早いかな〜って」

「早くねえよ!!システイは今でも充分強えじやねえか!!」

「ううん。私なんてまだまだだよ」

そう言うとシステイは暗い顔をして俯いてしまう。そんな顔をされては流石のナツも言い返せない。

そう。私はまだまだ弱い。

みんなを守るくらい強くならないと…

時間は刻々と過ぎ、夜も耽ていく。

今夜は何だか嫌な感じだ。

「何も起こらないといいけど…」

システイはどこか胸騒ぎを感じながらそつと呟いた。

翌日、マグノリア広場にて—

「通してくれ、ギルドの者だ」

人だかりが集まる中をエルザが先導し、押し進む。

そして……

「つ!!レビイちゃん…!!」

「ジェット…ドロイ…!!」

「ファントム………!!」

システイ達の目の前には、鉄の杭で腕を固定され、傷だらけの状態
で木に括りつけられているレビイ、ジェット、ドロイの姿だった。

「ひ、ひどい……」

「こんなの、有り得ない」

三人の姿にハッピーとシエリルの目には涙が浮かぶ。

システイは静かに三人に歩み寄ると、風を纏わせた手刀でレビイ達
を捕まえていた鉄の杭を切断した。

レビイ達を順に支え、木に寄りかからせるとシステイは回復魔法を

掛ける。

「…………マスター……………これでも、手を出さないと…?」

音もなく、静かにその場にやってきたマカロフにシステイは振り返ることなく問いかける。

システイの怒りに呼応するように周囲の空気が振動し、草木を激しく揺らす。

また、彼女の声の中にも強い怒りを感じさせ、殺気すら纏っていた。

「ボロ酒場までなら許せたんじやがな……………」。

ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ…」

ここで初めてマカロフが怒りを見せた。

「戦争じゃ…!!」

持っていた杖を握り潰し、宣言した。

妖精による幽鬼の殲滅を―

17. 妖精の反撃

ファイオーレ王国にある、オークの街。

そこに、ギルド^{フアントムロード}の「幽鬼の支配者」のギルドホームがあった。

そこでは、現在妖精の尻尾^{フェアリーテイル}についての話題で持ちきりだった。

「だっはっはっー!!サイツコーだぜこりやあ!!」

「妖精のケツの奴らはボロボロだつてよお!」

「その上ガジルのやつア、三人もやってきたつて」

「ヒユウー!!流石だぜ!」

男達は盛大に酒を飲み、大騒ぎする。

「そういやあ、マスターが何か言つてなかつたかア?」

「さあ?知らねーな」

「どうでもいいさ!それより惨めな妖精に乾杯だぜ!」

「おぉーよ!!」

酒を更に注ぎ、大笑いするフアントムの魔導士達。

互いにグラスを打ち鳴らし、ゲラゲラと笑っていると――

ドツゴオオオオオオオオオオオツ!!!

大きな爆発音を立て、ギルドの扉が吹っ飛ぶ。

「妖精の尻尾じゃああああああつ!!!」

殴り込んできたのは怒りに揺れる妖精。

マスター・マカロフのその怒声と共に一斉に妖精の魔導士達がフアントムの魔導士達を攻撃していく。

「誰でもいい!!かかつてこいやゴリアあああああ!!!」

ドオオオオオン!!!!

「ぎやあああああつ!!」

「こ、こいつ!!妖精の尻尾の火竜^{サラマンダー}だつ!!」

ナツに続き他のメンバーも次々と襲撃していく。

「こ、こいつ!!氷の造形魔導士のグレイだっ!!」

「妖精女王のエルザもっ…!!」

皆がファントムの魔導士達に容赦のない攻撃をし、圧倒していく。そして、一番最後に乗り込んだシステイは状況を冷静に観察し、二階部分に狙いを定める。

「あんたら…妖精の尻尾に手え出しといてタダで済むと思うなよっ!!
天竜の…咆哮オ!!」

「「ぎゃあああああつ!!!」」

システイの放ったブレスは建物を貫通し、一階で乱闘をしていた連中に瓦礫の雨を降らせる。

「こ、こいつ…まさか妖精の戦姫…。システイ・トワイライト!?」
「ちくしよおおおおお!!!」

システイに向かって四方八方から一斉に突撃してくる。

だが、システイは周囲を一瞥すると、両手に風を纏わせる。

「天竜の翼撃イ!!」

システイは周囲の敵を一撃でなぎ払う。

「ぐがああああ!!!」

「ちい!!マスターだ!!マスターを狙ええ!!」

やけになった数人が、突っ立っているマカロフに魔法を展開するが、それはこれ以上ない愚策だ。

「……………カー…!!!」

一瞬で巨人化したマカロフは、その拳でファントムのヤツらを殴り潰す。

「ひ、ひい…!?ば…化け物……………」

「貴様らはそのバケモンのガキに手エだしたんだ…。人間の法律で自分を守るなど…夢々思うなよ!ああ!」

「や、やめ…」

マカロフの威圧にファントムの魔導士達は腰を抜かすが、蹂躪は終わらない。

「っ…強ええ…」

「兵隊共もハンパじゃねえぞ!!」

「こいつら、メチャクチャだろ…!?!」

圧倒していく妖精にファントムの奴らも徐々に引き下がっていく。

「ジョゼエー…!!出てこんかあっ!!」

「どこだ!?ガジルとエレメント4はどこにいるっ!!」

マカロフとエルザの叫び声が響く。

そして、それを上の方で鑑賞している影が一つ。

「けっ…。あれがマスター・マカロフに妖精女王のエルザに妖精の戦姫のシステイかア…。凄まじいな。どの兵隊よりも頭一つ二つ抜けてやがる…」

ギヒツと不思議な笑い方をする黒髪の男。

「ギルダーツにラクサス、ミストガンは参戦せずか…。舐めやがって」

男は腰を上げ、立ち上がり更に笑みを深める。

「ギヒツ…。しかし、これほどまでマスター・ジョゼの計画通りに事が進むとはなあ…。せいぜい暴れ回れや…クズどもが…」

システイ達がファントムを襲撃している頃、一人置いていかれたルーシイはレビイ達の見舞い品を買い、三人の眠る病室に戻るところだった。

「もお…。皆あたしを置いて行っちゃうんだから……………」

あたしってそんな弱く見えるかなあ?と一人ぶつぶつ呟きながら裏道を歩いていると、ぽつりとルーシイの頬に水が落ちる。そして、ザアアとももの数分で雨が降り始めた。

「ん?何?…通り雨?」

「……………しんしんと」

「……………っ!？」

雨空を見上げるルーシイの耳に誰かの声が届く。

ルーシイの目の前に傘をさした女が歩いてくる。そして、ルーシイと目が合うと、その女は足を止め瞬き一つせずに見つめる。

「え?…なに?…」

「……………それでは、^ご機嫌よう…しんしんと」

「はあ!？」

何なの、この人…とルーシイは呆然とその様子を見つめる。

次は女の後ろ、地面から帽子とメガネを掛けた男が現れる。

「ノンノンノン。ノンノンノン。ノンノンノンノンノンノンノンノン」

「三・三・七のNOでボンジュール?」

「ま、また変なのが出た!!」

「ジュビア様…。ダメですなあ、仕事放棄は…」

「……………ムツシュ・ソル」

女は「ジュビア」、男は「ソル」という名のようにだ。

「私の眼鏡がささやいておりますぞお…。そのマドモアゼルこそが愛しのシブルだとねえ…」

「え……………シブル…標的……………?…」

「あら……………この娘だったの?」

「え…?…何なの?」

ルーシイには二人が何を言ってるのかわからなかった。

「申し遅れました…私の名はソル。ムツシュ・ソルとお呼びください。

偉大なる幽鬼の支配者より、お呼びにあがりました」

「ジュビアはエレメント4の一人にして…雨女」

「ファントム!? あ、あんたたちがレヴィイちゃん達を!!」

目の前の2人がファントムの魔導士だと知ると、ルーシイは即座に身構える。

「ノンノンノン。三つのNOで誤解を解きたい…。ギルドを壊したのも、レヴィイ様を襲ったのもら全てはガジル様」

ソルがそう言い、目を細めた瞬間、ルーシイは突然現れた水の玉に包まれ、その拍子に鍵を落としてしまった。

「っ!? うぐぐあ!？」

「まあ、我々ギルドの総意である事には変わりありませんがねえ」

水の玉はルーシイを取り込み、遂には完全に玉の中に閉じ込められてしまう。

「んっ!? ふ…ぶ、ばっ! う…うぐ…うぐ…!？」

ルーシイはどうかにかして水面から顔を出そうとするが水は意志を持ったかのように動き、ルーシイを逃さない。

「ジュビアの『水流拘束』^{ウォーターロック}は決して破れない」

ジュビアが手を動かすと水球は大きさを増し、ルーシイを拘束する。そして、ついにルーシイは息が続かずに気絶させられ、ファントムに囚われてしまった。

「大丈夫…。ジュビアはあなたを殺さない…。あなたを連れて帰る事がジュビアの任務だから……。」

ルーシイ：「ハートファイリア」様」

一方その頃、ファントムのギルド内では未だに乱闘が続いていた。

「エルザ、システイ!! ここはお前達に任せる!」

わしは、ジョゼの息の根を止めてくる…!!」

マカロフが前で戦闘を続けるエルザとシステイに叫ぶ。

「マスター…! お気をつけて…」

…また…嫌な予感がする…

ジョゼがいるであろう最上階へ消えていくマカロフのその背を見て、システイは顔を歪める。

「……………気をつけて…マスター…」

そして、マカロフがいなくなったのを見て、ようやく一つの影が動き出す。

「ギヒツ！厄介なのがようやくいなくなったぜ…。こつから暴れるぜえ……………」

そう呟くと、男は乱闘する場へ飛び降りる。

「ギヒツ!!来いやクスどもお!!」

「あいつは…!黒鉄のガジル!!」

その男は、幽鬼の支配者に所属する鉄の滅竜魔導士「黒鉄のガジル」その者だった。

「鉄竜棍!!」

ガジルの狙いは完全に背を向けていたシステイ。

だが、システイは振り向き様に、

「月竜の鉄拳!!」

システイの拳が迎え撃ち、ガジルをいとも簡単に吹き飛ばす。

「…ギヒヒツ…最高だぜ、妖精の戦姫…。殺りあおうや…」

「黒鉄のガジル…。ギルドのみんなを傷つけた罪は重いぞ!!」

システイが濃厚な殺気を放ち、一触即発の雰囲気漂う。

しかし、

「ガジルウウウウウウウウウ!!!」

ナツの突然の乱入によって緊張が解ける。

「は!!火竜がやるってかあ!?!」

飛びかかってきたナツの拳をガジルは鉄化した手で受け止める。

そこから幾度か二人の攻防が続くが、それよりも激しい戦いが建物を揺らす。

ゴゴゴゴゴオ!!

「やべえな、こりゃあ…」

「これはマスターの…マスター・マカロフの怒りだよ!!」

「マスターがいる限りお前達に勝ち目はない!!!」

妖精の尻尾の魔導士達はその振動と魔力に士気が上がり、逆にファントムの魔導士達は恐怖に震え始める。

妖精の総攻撃が再び開始される。そう誰もがそう思った時、

……!!…何か…降ってくる…!?

システイが何かを感じ、上を見上げた時、

ズツドオオオオン!!!!

何かが落ちてきた。

巻き上がった煙が晴れると、そこには魔力が全く無くなってしまったマカロフの姿があった。

「っ!!マスターっ!!!」

すぐにシステイが駆け寄り、その身体を抱え上げる。

「わ、わしの…魔力が……」

「マスター!!」

「じっちゃん!!」

「おいおい…何が起きたんだ!?!じーさんから魔力を全然感じねえぞ!?!」

「マスター!!しっかりして!!」

必死にシステイが呼びかけるが、マカロフは、それに苦しげに呻くだけである。

マカロフがやられたことにより、今度は妖精の尻尾の士気が下がり始め、ファントムの士気が上がり始める。

「くっ……。撤退だ!!全員、ギルドへ戻れ!!!」

これ以上は不味いと判断したエルザは大声で指示を出す。

「何!?!俺はまだやれるぞ!」

「ここで逃げてちや漢じゃねえ!!」

エルザの指示に納得いかないナツとエルフマンだが、エルザが無理にでも撤退させる。

「ギヒッ！もう終わりか…つまんねえなあ…」

撤退する姿を再び上から見下ろすガジル。

そして、その背後に巨体の男が現れる。

「…アリアか……………」

「全てはマスター・ジョゼの計画通り…素晴らしい!!」

そう叫び泣き始める男…「アリア」。

「いちいち泣くんじゃねえよ…うぜえな…。で?…ルーシイとやらは捕まえたのか?」

「…!!」

ナツとシステイの驚異的な聴力が遠くにいるガジルの言葉を確かに聞き取る。

「計画通り、今は本部に幽閉している…」

「なん…だと!?!」

「…ルーシイが?」

ナツとシステイの声が聞こえたのか、ガジルは二人を見下ろし、ギヒッと笑う。

「ガ、ガジル!!どういうことだア!?!」

「待ちなさいっ!!ルーシイを…ルーシイをどこにつ!?!」

二人の止める声を他所に、ガジルはアリアと共に姿を消した。

「くそ!!ルーシイが捕まっちゃった…」

「…ナツ、まだいけるよね?」

「あ?ああ、もちろんだ!!」

ナツの頷く姿を見てシステイはニツと微笑み、背中を押す。

「ここは任せて。ルーシイのこと、頼んだわよ」

そう言うと、撤退する妖精の尻尾の魔導士達に向けた魔法陣を展開するファントムの前に立ち塞がる。

「っ!?システイ、何をしている!!」

「エル姉、私が時間を稼ぐからその内に…」

「よせ!!無茶だ、システイ!!」

ザツと見て戦力差は一对二百ぐらいだろうか。正直、一度にこれだけを相手にするのはシステイでも流石にきつい。

だけど、仲間のためにもやるしかない。

「大丈夫!!すぐ追いつくから。ナツも……ルーシイをお願い」

「……………おう!!」

システイの、言葉でナツはルーシイを助けるために駆けていく。

そして、エルザも苦々しい表情を浮かべ、システイに背を向ける。

「…すまん、システイ……………」

「謝らないで、エル姉。…そっちは任せるね」

「……………さて……………」

エルザも走り去っていく姿を確認し、システイはファントムの魔導士を前に立ち向かう。

これだけの数を相手にするのだ。システイも本気のギアを一段階上げる。

「悪いけど、流石に手加減なんて、出来ないからね」

「エアロ・ドライブ」

システイの体を吹き荒れる風が包み込み、身体能力を向上させるとともに、向かってくる魔法を全て弾き飛ばす。

「天竜の羅貫」

「「ぎやああああああ!!」」

右手から圧縮された竜巻か、まるでブレスのように放たれ敵陣に突き刺さる。

だが、ブレスと違うのは、薙ぎ払いが出来るところだ。

「う……りやあああ……!!!」

「ぐああああああつ!!!」

吹き飛ばされるファントムの魔導士達。

何とかその攻撃を回避した奴らも魔法で反撃するが、風に阻まれてかすり傷すら付けられない。

「てめええええええ!!」

「調子乗ってんじゃねえぞオ!!!」

魔法攻撃が通じないと判断すると、今度は武器を取って近接戦を挑んでくる。だが、魔法ですら勝てないのに肉體戦で勝てるはずもない。システイは確実に攻撃を避け、カウンターで全員の顔面に強烈なパンチを放ち、意識を刈り取っていく。

「そろそろだね…。ルーシイも救出出来ただろうし、早くしないとエル姉に怒られちゃう…」

ルーシイの魔力に集中して感じ取ると、発信源は妖精の尻尾の方へ向かっているのが感じられた。どうやらナツは無事救出出来たようだ。

これで一応システイの役目は終了だ。

「貴方達、これで終わりだと思わないことね。必ず、私達がぶっ飛ばすから」

ここで、妖精と幽鬼の戦いが一時休戦となった。

だが、ここで終わるはずもなく、幽鬼の壮絶な反撃がまもなくはじまる――

18. 幽鬼の逆襲

ファントムのギルドから戻り、妖精の尻尾フェアリーテイルでは怪我をした者の治療や次の戦いに向け作戦や魔法具の補充など、全員が次に向け動き回っていた。

そんな中、ルーシイはただ一人ギルドの中で椅子に座り、暗い表情をしていた。

「…どーした？まだ不安か？」

俯き暗い表情をするルーシイにグレイは声をかける。

「ううん…そうじゃないんだ…。なんか、ごめん…」

そう謝り、ルーシイはまた俯いてしまう。だが、ファントムの狙いがルーシイだったからといって、ルーシイが責任を感じることはない。

「ルーシイ、誰もこうなったことが貴方のせいだなんて思っていないよ」

「ああ、謝る必要はねえ」

「しかし、まさかルーシイがお嬢様だったとはなあ…」

「オイラもびっくりしたよ…。どうして隠してたの？」

ナツとハッピーの言葉にルーシイは苦しげな表情を浮かべる。

「隠してたわけじゃないんだけど…家出中だし言う気になれなくて…。ごめん…迷惑かけて…。ほんと、ごめんね…」

「ルーシイ…」

「あたしが…家に戻れば済む話なんだよね…。そうすれば皆にも迷惑かけないし…」

「そんなことしなくていい…」

ルーシイが自責の念に押し潰されそうになっているのが見えていられず、システイはルーシイを優しく抱きしめた。

「シ、システイ…」

「それは違うよ、ルーシイ…」

誰も、あなたが悪いなんて思っていないし、誰もルーシイのせいで迷

感かけられてるなんて思ってたないよ。

ルーシイ……お願いだからそんなに自分を責めないで？」

ね？とシステイに慰めるように抱きしめられ、ルーシイは思わず涙を流した。

「ルーシイはさ、この汚ねえ酒場で笑って騒ぎながら冒険してる方が似合ってるしな」

「ナツ……」

システイに続き、言葉をかけてくるナツを見つめるルーシイ。

ナツはルーシイの頭を撫で、ニカツと笑う。

「ここにいてえんだろ、ルーシイ。戻りたくない場所に戻って何があんだよ？」

お前は……「妖精の尻尾」のルーシイだろ？」

「ルーシイ……貴方の本心は？本当に帰りたい……？」

システイの問いかけにルーシイは即座に弱く首を横に振った。

「ううん、……帰りたくない……。私……私は……ここにいたいよお……」

ルーシイの答えを聞きシステイはふつと柔らかく微笑みを浮かべ、より一層強く抱きしめた。

「ルーシイ……なら、迷惑なんて思わないで？」

私は……ううん、私達は、全力で守るから。だから笑って？ここが、貴方の居場所なんだから」

「うん……うん……」

絶対に守りきるんだ……ルーシイも……みんなも……

大粒の涙を流し続けるルーシイを抱きしめながら、システイは改めて心に強く誓った。

ルーシイが泣き止み、ギルド内の慌ただしい雰囲気も少しは和らいだ頃、それは突然やって来た。

ズン…………ズウン…………！ズウン…………！！

「な、何だア!?」

「一体、何が…」

「外だー!!!」

その声を聞いて、みんな一斉にギルドから飛び出すと、外には大きなロボットのようでお城のようでもある建造物が海を歩いてギルドに近づいてきていた。

「な…なんだありやああああああ!?」

「でっ…かくねえか!?」

「こつちに來てるう!?」

ナツ、グレイ、ハッピーが口々に叫んでいる。

「フアントムかっ!?」

「っ…こんな方法で攻めてくるなんて…………!?」

ギルドに迫ってくるソレを見上げ、システイは拳をきつく握りしめる。

そして、それは突然動きを止めると、建物の中心にある砲台の先端に大量の魔力を集め始めた。

「なっ…!?ま、まさか…!?」

「あれは…魔法集束砲ジュピターか!?」

「なにイ!?ギルドごと吹っ飛ばす気かあ!?」

「つく…全員、伏せろおお!!ギルドを…やらせるものか!!!!」

エルザは全員の前に立ち塞がる。

「ちよ、エル姉!」

「まさか…!?エルザ、あれを受け止める気か!?」

「よせエルザ!!いくらお前でも…」

全員が止める中、エルザは魔法鎧を換装させようとする。だが、それより先にシステイは動いていた。

「天竜の鋼殻!!」

「っ!」

エルザを含むギルドメンバー全員を半透明の殻が覆い尽くす。

この殻は一見脆そうだが、竜の鱗並みの硬さと防御力を併せ持っている。しかもそれは双方向で、中からも容易に破れない。

「システイ!早くここから出すんだ!!」

「……ダメだよ、エル姉……。あなたは、倒れちゃいけない……。エル姉は妖精の尻尾を勝利に導く女王テイターニアだから……。

だから私が……戦姫の私があるを止める!!」

システイはみんなに背を向け、一人で砲撃を待ち受ける。

「っ……!?!システイ……!?!」

「やめろ、システイ!!」

「やめろおおおお!!!!」

「皆は私が……絶対守ってみせるっ!!!」

システイは両手を構え、魔力を高める。

「天竜の風壁!!」

構えたシステイの両手から広がるように風の壁が展開される。

「壁……まさか……!?!」

「まさかシステイ……ホントにあれを受け止める気での!?!」

「システイ!!そんなの……体が持つわけない……!?!」

シエリルが涙を流して訴える。

エルザもシステイを止めようと動くが、システイはもう止まれない。

「イルアーマー、イルアームズ、デウスエクセス神の騎士!!」

システイは自身に攻撃力防御力倍加、全身体能力上昇の付加魔法をかける。

まさに、システイの全力全開。システイは全力を持って砲撃を迎え

撃つ気なのだ。

「システイっ…!!」

「やめろナツ!!」

今にも殻を壊して外に出ようとするナツをグレイは引き止める。

「ナツ、今はシステイを信じるしかねえ!!」

「くそ…システイ…」

強くなつたつもりだった。それこそ、仲間を守れるくらいに…。

だが、目の前には自分達を守ろうとする少女が立っている。

見た目は自分よりか弱そうな少女なのに、自分の実力は彼女の足元にも及ばない。

俺は、いつも守られてばかりだ…。俺は、まだまだ弱い…。

「くっ…みんな伏せろお!!!」

エルザの声が響いたその瞬間、魔法集束砲が発射された。

ドツ…ゴゴゴゴオオオオオン!!!!

収束砲から放たれた魔力が一瞬で空を駆け、防壁と接触する。

「うぐぐっ…!!ん、んのおおお…!!」

防壁の風が威力を外側へ逃がしてはいるが、強力すぎる威力のせいで徐々に押され始める。

ミシ…ミシミシッ…!!

気流が乱れ始め、どんどん押されていく。

「っこんのお…!!ま、けて…たまるかああ!!」

瞬間的に魔力を上げ、ほんの一瞬だけ押し返す。

その瞬間、風の防壁は霧散し、受けきれなかった魔力がシステイに

襲いかかる。

「うおおおおおっ!!!滅竜奥義…絶華・乱空迅」
ぜっか・らんくうじん

ドオオオオオオオオオオオオオン!!!!

「ぐあああああああつ!!!」

「システイーーー!!!」

システイの魔法と砲撃が衝突し、大爆発を引き起こした。それに加え、相殺し切れなかった残りの威力とともにシステイは吹っ飛ばされた。

砲撃が終了し、鋼殻も消滅する。それと同時にナツは走り出していた。

システイの倒れるところに走り寄り、抱き上げる。

「システイ!!しっかりしろ、システイ!!」

「う……くっ………ナツ……」

二人の下にエルザ達も駆け寄る。

「システイ!!!しっかりしてっ……!!」

「バカ者!!何故前に出たっ!?!」

「無茶し過ぎだよ、システイ!!!」

ルーシイ達の声にシステイは消えかけている意識を何とか繋ぎとめる。

「みんな…無事…?私…守れた…かな…?」

「うん!うん…!みんな、無事だよ!!」

「そ……よかった……」

安心したようににつこりと微笑むシステイを見てルーシイはまた涙が溢れ出す。

『…マスターマカロフ…次いで戦姫も戦闘不能』

ファントムのギルドから、スピーカー音でジョゼの音が響く。

「っ！やろお……………!!」

『もう貴様らに…凱歌は上がらん…。大人しくルーシイ・ハートフィリアを渡せ…。今すぐだ』

「誰が渡すかつ!!」

「仲間を差し出すギルドがどこにある!?!」

「っ……………!」

ジョゼの言葉に反論する妖精の尻尾たちの言葉にルーシイは涙が溢れ、止まらない。

家に帰りたくない…。

その気持ちは本ただけど、自分が家に戻ることで解決するのなら、自分は家に帰った方がいいんじゃないか。

そう思っていると、ルーシイの手を誰かが強く握った。

「…っ！システイ…」

「……………だい、じょうぶ、だよ……………。…ルー、シイは、私達が…絶対、守る、から…ね?」

システイは苦しげに呼吸をしながらもルーシイに微笑む。

「でも…でもっ！あたし……………」

「仲間を売るくらいなら…死んだ方がマシだア!!」

「っ!!」

ルーシイの言葉を遮るようにエルザの声が響いた。

「そーだそーだ!!」

「ルーシイは仲間だ!!渡すもんか!!」

「みんな……………」

エルザの言葉に続き、叫ぶ仲間達を見てルーシイは言葉を失う。

『チイ…ならば、特大の魔法集束砲をくらわせてやる!!今度は防げるなど思うなよ。発動までの15分、恐怖の中であがけ!』

ジョゼの怒り狂う声が響くと、ファントムのギルドから浮遊する無数の兵が飛んでくる。

『地獄を見ろ…妖精の尻尾…。貴様らに残された選択肢は二人だ』

……。

我が兵に殺されるか、魔法集束砲で死ぬかだ！』
そう言うと、ジョゼの声は途切れた。

「ど、どーすんだよ!?魔法集束砲をどうにかしないと…」

「システイですらあの様だぞ?!」

「おまけにファントムの兵なんざ…ヤバイだろ!」

どうすればいいか仲間内で混乱が広がる。

そんな中、辛うじて意識を保っていたシステイがギョツと近くにいたナツとエルザの手を握る。

「っ…システイ?」

「は…はあ…ナツ…エル姉…行って…。私は…大丈夫…。」

ナツ、は…あれを…止め、て…。」

「システイ…。ああ、分かった…。俺がぜってえ止めてくる!!」

ナツのニカツとした笑みを見てシステイも微笑み、手を離す。

「エル姉…みんなを…お願い…ね…」

「ああ、承知した」

エルザの返事を聞くと、システイはその瞳を静かに閉じ、気を失った。

「…ルーシイ、システイを頼む…。」

ナツは気を失ったシステイをルーシイに預けた。

システイが戦えねえ今、俺がやんなきゃ誰がやるんだ…!!

ナツは自分で両方の頬を叩き気合を入れる。

「システイとの約束だ…俺は必ずあれを止める!!」

「ナツ…私達も後から追う…。先に行ってくれ」

エルザの言葉にナツは「おう!!」と頷く。

「ハッピー行くぞ!!」

「あいさー!!」

そして、ハッピーとともに魔法集束砲の砲台へと飛び出した。

「頼むぞ…ナツ」

エルザはナツの後ろ姿を見届けると、半壊したギルドを振り返った。

「システィや負傷者を中へ運ぶぞ!!」

その他の戦闘のできるものは準備して応戦する!!

行くぞお!!!」

「「「おお!!!」」」

エルザの号令により妖精達が動き出す。

今、今度こそ妖精と幽鬼の本当の全面戦争が幕を開ける――

19. 蘇る記憶

システイは気づけばどこか分からない空間にいた。意識は朧げで、どっちが上かさえも分からない。

……………ここは…どこ……………？

辺りを見回し、システイは首を傾げる。

確か、ギルドにファントムの奴らが攻めてきて、魔法集束砲を撃とうとしたから私が受け止めて……

それ以降の記憶はどう頑張っても出てこない。

記憶の整理を諦め、今度は辺りを見渡していると、

“……………動くな……”

…っ!?

突然、システイの頭に直接声が響いた。

それは、二度と聞きたくなかった男の声だった。

気がつけば周りの風景が病室に変わっており、システイは四肢をきつく縛り付けられていた。

コツコツという足跡とともに、向こうから誰か人のシルエットが近づいてくる。

誰だかよく分からないほど霞んだシルエット。だが、システイには一目で分かった。

あいつだと…。

“お前のその力は私のものだ…。その力を私に寄越せ…!!”

男のシルエットは、システイの体に奇妙な魔法具や、注射器を躊躇なくぶっ刺してくる。その度に激痛が走り意識が朦朧とするが、気を失うことは出来ない。

いつそ、気を失えばどれだけ楽か。それほどの激痛だった。

「痛い…痛いよ……。やめて、これ以上は…やめてええええ!!!」

システイの身体に打ち込まれたものは次第にシステイの体を蝕み、精神も壊していく。

だが、唯一光があった。

彼女の存在だ。

エルザよりも真っ赤な髪をしているいつも元気な女の子。システイと同じように何かの実験に利用されていて、いつも両腕には数え切れないほどの注射の跡があった。

出会ったのは偶然。ただ、ぼんやりと夕日を眺めている時に話しかけられたのが始まりだった。互いの存在は辛い実験の記憶を忘れられる心地よいもので、決まって夕方には会って暗くなるまで一緒にいた。

トワイライトの名も彼女から貰ったものだ。笑顔は夕日のように朧げで綺麗だからという安直なものだったが、システイにとっては親友からのプレゼントのようなものだった。

だが、その日以来彼女が現れることは無かった。

光を失い、実験もさらに激化し、ついにシステイの精神は完全に崩壊した。

「ああ…あああ。あああ。ああ。あ。あ。あ。あ!!!」

薬品の投与を終えた男は、今度は肉体的ダメージをシステイに与え続ける。

高電圧の電気を流したり、死には至らない程度の毒物を投与したり…。終いには両腕を潰されたりもした。

やめて…やめて…やめテ…やメテ…ヤメテ…ヤメロオオオ…!!!

そこで意識は途切れ、気づけば今度は沢山の瓦礫の山の上に立っていた。

ああ、開放されたんだ…。

そう思い、ふと自分の足元に目をやると、自分を苦しめ続けた男の腕が瓦礫に紛れて落ちていた。

その瞬間に悟った。

自分が何をしたのか。

悲鳴を上げるシステイ。その目には涙が溢れ、頬を濡らす。

システイは堪らず逃げ出した。一刻も早くその場所から遠くに離れたかった。

雨に降られ、何度も転けながらも、システイは光を求めて走り続けた。

そして、光が差す―

システイー！！！！

これは、ナツの声…？

システイっ！！！！

これは、エル姉の声だ…。

システイ…。

これは、シエリルの…。

ああ…。…。行かないや…。みんなが待ってる…。

今…。…。行くから…。

そして、システイは光の射す場所へ向かい、歩き出した。

20. 復活の戦姫

「システイ…………システイっ!!!」

目を覚ましたシステイの視界には顔を涙で濡らし、小さな手で自分の手を握るシエリルの姿が映った。

「シエリル…」

シエリルはシステイが目覚めたことに気づくと、嬉しさのあまり飛びついた。

「システイ!!…良かったあ!!…ホントに良かったあ!!」

「ごめんね、心配かけて。もう大丈夫だから…」

本当は全く大丈夫じゃない。身体中は痛むし、魔力もほとんど残っていない。それでもシステイは痛む身体に気付かぬフリをして体を起こし、シエリルの頭を優しく撫でた。

そして、シエリルを傍に下ろすと、枕元に置いてあった薄めの上着に腕を通し、立ち上がる。

「ちよつとシステイ!?何やってるの!？」

「何って…私も皆のところに行こうかって…」

あつけらかんと言うシステイはそのまま足をギルドの外へ向けるが、その足取りはどこか覚束無い。

「ダメだよシステイ!!身体中傷だらけで…魔力もほとんど残っていないでしょ!？」

「まあ…ね。でも、行かなくちゃ…。みんな戦ってるのに私だけ休んでるわけにはいかないよ…」

システイはシエリルを見つめ、小さく微笑みを見せる。

「で、でも……………」

「…それに…………もう誰かを失うのはゴメンだから…」

システイはそう言うと言を閉じ、朱色の髪をした彼女を思い浮かべる。

…………もう、あんな思いをするのは絶対に嫌だ…。

目を伏せるシステイを見つめ、シエリルも何かを感じとった。

「…分かった……でも、危なくなったら止めるからね？」

「ありがと…シエリル」

シエリルからの許可が下りるとシステイはギルドの外へと出た。

「システイ!？」

「カナ、今の状況は？」

「それが…悪い。ミラがファントムの奴らに捕まっちゃった…」

「ミラが……。エル姉達は？」

「エルザ達はファントムのギルドで今も戦ってる。」

魔力収束砲はぶっ壊したけど、今度はあれが出てきてな…」

カナが指差す先には、煉獄^{アレスブレイク}砕破の巨大な魔法陣が上空に描かれていた。

「ミラが、カルディア大聖堂辺りまで消し飛ぶって…」

「確かに、あの感じだとこの辺一帯は吹き飛びそうだね」

魔力の集中具合からして、残された時間は十分も無いだろう。

「シエリル、行くよ!!」

システイはファントムのギルドを睨みつけ、ギルドから飛び出す。

「待って、システイ!! あんた…そんな身体で行く気!？」

「カナ…。私は何と言われようと止まらないし止まらない。」

それに、少し休んだから大丈夫だよ」

システイの痩せ我慢が見え見えの笑顔にカナは深いため息をつく。

「はあ…分かったよ……。でも、無茶だけはすんなよ……」

「……うん!」

カナの言葉に力強く頷き、システイは近くに落ちていた刀を手にとった。

魔力が圧倒的に不足している今、道は刀で切り開くしかない。

「…
//^{アームド}纏え」

刀身に風を纏わせて、切れ味を高める。

「よし!じゃあ、行ってくる!!」

飛び出すと同時にファントムの兵を切り裂き、どんどん前へと進んでいく。

それでも一瞬で、再び幽鬼の兵が集まっていく。

だが、今度は妖精達も怖気付いてはいなかった。

むしろ、最強システイの女が復活したことにより、仲間内での士気は格段に上がっていた…。

「システイも頑張ってるんだ!! ナツやエルザも…エルフマンやグレイもあつちで頑張ってる…。私達も私達の家を守るよ!!!」

カナの喝と共に、妖精達はファントムの兵の攻撃に対抗する。

システイもファントムの兵の大軍を切り抜けながら、ナツ達の元へ急ぐ。

「……………もう少し…。もう少しだけ…耐えて……………」

戦いの中にいるナツ達を思い、システイは拳を強く握り締める。

妖精と幽鬼の壮絶な戦いは、妖精ヴァアルキリーの戦姫の復活とともに、激化する。

決着の時は、まもなく訪れる……………。

21. 援軍

システイがまだフアントムのギルドへ向かっている頃、エルザは満身創痍の身で幽鬼フアントムロードの支配者のマスター・ジョゼとの戦いを強いられていた。

「ぐはあっ!!」

「ほう…まだ耐えますか。私と戦い、ここまで持ちこたえるとは…もしアリアとのダメージが無ければもっとマシな戦いが出来たでしょうに…」

「くっ…強い…」

痛む体に鞭を打ち立ち上がり、魔法剣を換装するとジョゼに斬り掛かる。

しかし、何度も剣を振るも傷ついた体では本来の速度は出ず、簡単に攻撃は避けられる。さらに、幾度目かの攻撃の際に一瞬隙を見せたエルザを見逃さず、その足首を掴まれ、投げ飛ばされる。

「ぐっ…くっ……」

空中で体勢を立て直し、なんとか床に着地するエルザはジョゼを睨みつける。

「貴様…アリアとの戦闘で魔力を消費しているはず…。なぜまだ動ける?」

「仲間が私の心を強くするんだ…。愛するもの達のためならばこの体など…惜しくない!!」

ジョゼの問いかけに迷いなく、真っ直ぐとした瞳で答えるエルザを見て、ジョゼは笑みを深める。

しかし、その額には僅かに青筋が立っていた。

「クククッ!なんて気丈で美しい…。なんて殺しがいのある小娘でしょう…。」

…何故、私がマカロフにトドメをささなかつたか…お分かりですか?」

「…なに?」

エルザは剣を構えながらジョゼを見つめる。

「絶望を与えるためですよ。

目が覚めた時、愛するギルドと仲間が全滅していたらどうでしょうか？クククツ悲しむでしょうねえ……。

あの男には絶望と悲しみを与えてから殺すのです!!ただでは殺さんよお!!苦しんで苦しんで、苦しませてから殺すのだあ!!」

「貴様…下劣な…!!」

ジョゼの語る言葉を聞き、エルザは怒りを顔にする。

「幽鬼の支配者はずっと一番だった…。この国で一番の魔力、一番の人材、一番の金があった。

……だが、ここ数年で妖精の尻尾は急激に力をつけてきた。エルザにラクサス…ミストガン、システイ……。

その名は我が町にまで届き、火竜の噂は国中に広がった。

いつしか“幽鬼の支配者”と“妖精の尻尾”はこの国を代表する二つのギルドとなった……。

気に食わんのだよ…!元々クソみてえに弱つちいギルドだったくせにイ!!」

「貴様…まさかこの戦争はその下らん妬みが引き起こしたというのか!?!」

「妬みだど？違うなあ…。我々はものの優劣をハッキリさせたいのだよ……」

ジョゼの言葉を聞き、エルザはさらに顔を歪める。

「そんな…そんな下らん理由で…!!」

ドゴオオオオン!!

不意に、ジョゼの放った魔法がエルザを吹き飛ばし、壁に叩きつける。

「ぐあっ!!!」

「前々から気にくわんギルドだったが、この戦争の引き金は些細な事だ。ただ、ハートフィリア財閥のお嬢様を連れ戻してくれという依頼さ」

ジョゼの口から出た言葉に目を見開くエルザ。

「う、ル…ルーシイを!？」

「この国有数の資産家の娘が妖精の尻尾にいるだど!? 貴様らはどこまで大きくなれば気が済むんだア!!」

「ぐっ……あああ……!!」

ジョゼはエルザの首を掴むと壁に叩きつけた。

「ハートフィリアの金を貴様らが自由に使えたとしたら間違いない。我々よりも巨大な力を手に入れる!!」

それだけは許してはおけんだア!!」

「がああああ、あ、あ、あ!!!」

ジョゼが叫び、怒声を上げる度に壁に押し込まれ、エルザを苦しめる。

だが、エルザは苦しみながらふっ…と小さく笑った。

「どつちが上だ下だ…と騒いでいること自体が嘆かわしい……。…が、貴様らの情報収集力のなさにも呆れるな。それでよく一番のギルドなどと言えたものだ…」

「……………なん、だど?」

「ル…ルーシイは……家出、してきたんだ……。家の金など…使える…ものか……!!」

エルザの告げる事実ジョゼは目を見開いていく。

「家賃7万の家に住み…私達と共に旅し……共に戦い、共に笑い、共に泣く……。同じギルドの仲間だ!」

戦争の引き金だど…? ハートフィリア家の娘…? 花が咲く場所を選べないように…子だつて親を選べないんだ…。

貴様に…貴様に涙を流すルーシイの何が分かる!!」

エルザはそう叫ぶと、ジョゼの手から逃れようと必死に足掻く。

そんなエルザを見て、ジョゼは不敵な笑みを浮かべる。

「確かに、家出人というのは誤算だった…。だが、何とでもなる。マカロフもシステイもない今、こちらの勝ちも同然だ。

そして、ハートフィリアの財産は、全て私のものとなるのだ!!」

「っ…貴様あ!!」

エルザの怒号が響いたその時…

「そんなこと…させるかアアア!!!」

突然の乱入者に不意を突かれ、ジョゼの顔面に拳がクリーンヒットする。

「ぐはっ!？」

不意打ちを食らったジョゼはそのまま壁まで吹っ飛ばされる。

そして、ジョゼの拘束から解かれたエルザは静かに崩れ落ちる。

「お、お前…」

「……………ぐめん、遅くなって……………」

エルザは驚きのあまり思わず目を見開く。

エルザの目の前には、戦闘不能になったはずのシステイが立っていた。

体はボロボロで、服の下には包帯が巻かれており、魔力もほとんど残っていない。

しかし、透き通るような緑色の丸い瞳は、明らかな敵意を倒れるジョゼの方に向けていた。

「…………システイ……………」

「あとは任せて…」

システイはそう言い、エルザを隅の壁に寄りかからせる。

「クツハハハハッ!!待っていましたぞ、ヴァルキリー戦姫っ!!」

貴様を…………貴様を殺し、妖精を地獄へと落としてやるっ!!」

魔力を荒らげ、叫ぶジョゼをゆっくりと振り返り、システイは刀を構える。

「…随分…派手にやってくれたね……………」

システイは刀の柄を強く握り締め、そして、ギロツとジョゼを睨みつける。

「絶対許さない…!!」

ここからは慈悲なんて無い…」

幽鬼は妖精の怒りを買った…。

そして今、戦姫から天罰が下される――

22. 決着

「さあ、蹂躪の始まりよ…っ!!」

「クククツ…待っていましたが、ヴァルキリー戦姫!!」

互いに睨み合い、両者とも相手の隙を窺う。

「喰らえ! デッドウエイブ!!?」

最初に動いたのはジョゼだった。ジョゼはシステイに向かって魔法を放つ。

対してシステイは、風を刀に纏わせて構える。

「つむじかせ旋風!!?」

システイは一閃でジョゼの魔法を両断する。

「ふむ…やはり、聖十大魔道に招待されるだけはある…。素晴らしい力だ…。だが、それでは私には勝てんよ…」

ニヤツと笑うジョゼを見て、システイも笑い返す。

「アンタこそ、それで聖十大魔道に選ばれたの? 弱すぎて話にならないんだけど?」

「クハハハッ! これが私の本気なわけがないでしょう…小娘が…」

ジョゼが手をかざすと不穏な魔力が集まり出す。

「吹き飛ば、戦姫!!」

ドオオオオン!!!!

放たれた魔法はシステイに命中する前に弾け、大きな音と爆炎をあげた。

「システイ…っ!?!」

「エルザ待つて!」

「っ!?! シェリル!?! お前もここに…」

立ち上がるうとしたエルザを寸でのところでシェリルが止める。

「ここはシステイを信じて!! お願い…」

爆炎が立ち上る中、エルザとシェリルはただそれを見守る。

「…それで？これで終わりなの？」

すると、そんなシステイの声が爆炎の中から聞こえる。

「なに…!？」

爆炎の中から現れたシステイには一切怪我が無く、それどころか、システイの立っていた床だけヒビ一つ入っていない。

ジョゼはその光景に目を見張る。

「貴様何故…!？」

「この程度の攻撃で私がやられるとでも？」

それに言ったよね？これは戦いじゃない。ただの“蹂躪”だって…」

システイは表情を消すと、一瞬でジョゼの目の前から姿を消す。

「なっ!?!どこに…」

システイを見失ったジョゼは辺りを見渡すが、システイは嘲笑うかのように背後から刀を脇腹に突き刺す。

「ぐっ!?!」

悲鳴を上げるジョゼに、システイは更に攻撃を仕掛ける。

ジョゼがどんなに反撃しようとシステイは全て躲し、接近したところを刀や手足でじわじわとダメージを与える。

そう。システイはこの戦いにおいて、刀への付与を除いて魔法を一切使っていないのだ。

「ふざけて…いるのか…!?!」

「なぜ？私は至って真面目よ？」

これは一方的な殲滅。たった一発の魔法で死ぬと思った？」

「ぐふっ!!」

強烈な蹴りを喰らってジョゼは吹き飛び、壁に叩きつけられる。

システイはジョゼの方へ歩み寄ると、刀の切っ先をジョゼの鼻先に向けた。

「早く立ちなさい。まだまだこんなものじゃないわよ」

その光景にエルザは驚く。

「システイ…:…こんなに強かったのか…?」

「…システイ…」

シエリルはシステイが負けるなど露にも思っていないが、システイは今すぐ倒れてもおかしくないほどの重症を負っているため、気がでなかった。

「ぐ……グハハハハ……。やはり強いなあ……戦姫……」

ジョゼは立ち上がると、システイを睨みつける。

「クククツ……後悔するんだな、戦姫……。……私に力を使わせることになるとは……ネエ!!!」

ゴオオオオ!!!

「っ!？」

ジョゼの魔力が爆発的に高まる。

その風圧はエルザやシエリルの方まで届き、二人は思わず顔を歪める。

「ぐっ!この魔力は……!!」

「な、なにこれ……!？」

「…地獄ヲ見ルガイイ……戦姫イ!!」

ドオオオオ!!

邪悪なエネルギーが再びシステイに向けて放たれる。当たれば怪我くらいでは済まないだろう。

システイは刀を鞘に収め、それが迫り来るのを静かに待ち構える。

「……朧月……」

キンツという微かな音が響き、ジョゼの魔法は真つ二つに切断された。しかし、ジョゼはそれ見越してシステイの後ろに回り込んでいた。

「シネエ……小娘エ!!!」

しかしシステイは振り返ることも刀を抜こうともしない。

しかし、それは勝負を諦めたのではなく、その必要がないからだ。

「グハッ…!？」

突然、ジョゼの左肩から右脇腹までの所から血が吹き出した。

「な、なぜ……いつの間に…」

「…二連撃抜刀術、『朧月』」

二刀目は音速を超えるわ。見えないなら貴方はまだまだだって事ね」

「ばか…な…」

バタリとジョゼは崩れ落ちた。

一瞬の空白の後、今度はシステイが膝をつく。

「ゼッ……は………はア………はっ…」

「システイっ!!」

倒れ、白目を向くジョゼを前にエルザとシエリルはシステイの元へと駆け寄る。

限界を超えたシステイは息を荒らげたまま近くの壁にもたれる。

「ギリギリセーフ……」

システイはさっきの技で砕け散ってしまった刀を眺める。システイの剣技と風の付与は刀に負荷をかけすぎる。決着まで刀がもつかどうかは正直賭けだった。

「システイ、体は大丈夫なのか？」

「まあ何とか……。ギリギリ…かな」

回復し切っていない魔力を振り絞って戦っていたため、システイの体は限界がきていた。すると突然、システイの目の前が揺らぎ、人の姿が頭になる。その瞬間、エルザの背筋に嫌な寒気が再び走った。

「っ!!システイっ!!」

システイの目の前に現れたのは、エルザが倒したはずのエレメント4の1人、アリア。

システイは起き上がることすらできず、苦しい表情でアリアを弱々しく睨む。

「悲しいなあ……。マスター・マカロフに続き戦姫まで私の手によって……!!」

涙を流しながら、アリアはシステイへ魔法を放つ。

エルザはなんとか止めようとするが、体が言うことを聞かず膝をついてしまう。

「システイっ!!!」

ドゴオオオオ!!!

「ぐはあっ!?!」

しかしその魔法は突然現れた巨大な手によってアリアごと吹き飛ばされた。

「……………もう終わったんじゃ、ギルド同士のケジメはつけた。もし、これ以上を望むのなら…貴様らを跡形も無く消すぞ。」

ジョゼを連れて去れ……………」

巨大な手が開けた穴から現れたのは、魔力を全て奪われて戦闘不能に陥っていたマカロフだった。

「マスター!!」

「心配かけたの、主ら。システイも、よく…やってくれた。お疲れ様じゃ」

「…マス…ター…」

朦朧とする意識のせいで視界がボヤけていたが、システイはマカロフの魔力を感じ取っていた。

そして、フワツと優しく頭を撫でられる感覚がシステイを包み込み、その優しさに触れ、システイの意識は途絶えた。

23. 復興

システイがジョゼを倒した後、結局評議会のルーンナイトが押し寄せ、数日間妖精の尻尾のメンバーは事情聴取を受けることとなった。そして、幽鬼フアントムロードの支配者との戦闘から一週間後、やつと普段の生活がスタートし始めていた。

現在、崩壊したギルドの跡地では新しいギルドの建設の為全員が丸となって動いていた。

「うおおおらあああ!!っーっーがつ!!」

角材を約十本程持ち、運ぼうとしたナツがその重さに耐えれず、ゴキツ!と嫌な音をさせて後方へ倒れる。

「わあ、痛そ…」

「ちよつとー…大丈夫ー? ナツー」

気の抜けたハッピーとルーシイの声がナツに向けられる。

「おおう…大丈夫だア」

痛みに耐えながらも答えるナツに、システイは苦笑を浮かべる。

「ちよつと、遊んでないでちゃんとしなさいよ?」

「一度にそんなに持つからだバーカ」

ナツの様子を見ていたグレイから喧嘩口調で挑発する。

「じゃあグレイ、お前システイに負けて悔しくねえのか!」

「え、私?」とシステイは首を傾げるが、ナツが言っているのはシステイの持つ角材の量である。

システイは片手で軽々と十本の角材を持っているのだ。

「だあああ!!負けてられるかああ!!」

「バカ、持ちすぎだ!!」

普段と変わらない喧嘩を始めた二人を見つめ、シエリルとルーシイはため息をつく。

「あーあ…そんな事してると………」

「そこおっ!!」

「グゲツ!!」

喧嘩を始めた二人の後ろからエルザからの怒声が響く。

「貴様ら、口より身体を動かせ!!一刻も早く妖精の尻尾を再建させるんだ!!」

「あい……………」

予想を裏切らない光景を見せる三人にシステイは思わず笑ってしまふ。

「あとシステイ!!」

「え、私?」

「お前はじつとしていると云っただろ!!そこでルーシイと大人しくしておけ!!」

「え〜いいじゃん、少しくらい…」

「ダメだ!!!」

「え〜」

エルザ、ナツ、グレイから同時に反対され、システイは仕方なくルーシイの隣に腰掛けた。

「ねえルーシイ、みんな過保護だと思わない?」

「いや、流石に今回は仕方ないと思うよ?」

「システイ、ポーリユシカさんに絶対安静って言われたでしょ?」

「う…そりやそうだけど…」

システイはジョゼとの戦闘の後、実は五日間も意識が戻らなかつたのだ。そして、目が覚めた現在も妖精の尻尾の専属医者ポーリユシカにより、絶対安静が言いつけられているのだった。

「お〜いルーシイ、こっち来てみるよ!!」

「な〜に〜ナツ?…ごめんシステイ、ちよつと行ってくるね?」

ナツに呼ばれて走っていくルーシイを見ると、突然後ろからロキが現れた。

「ごめんシステイ。これ、ルーシイに渡しといてくれないか…?」

そう言っただけで差し出されたロキの手には、ルーシイの鍵があった。

「これ、ずっと探してたの?言ってくれたら手伝ったのに…」

「悪い。それじゃ、後は頼む」

ロキは弱々しく笑みを作ると、「じゃあな」と言っただけで去っていった。

「…ロキ……………」

その後ろ姿をシステイは見つめていた。

……ロキ…あなたに残されているのは、あとどれ位なの……？

その質問は喉まででかかったけど、結局システイの口から出ることはなかった。

ルーシイが離れてから一時間くらい経った頃、ナツとハッピーがルーシイを引っ張ってシステイの元に戻ってきた。

「聞いてくれよシステイ!!ルーシイの奴、紛らわしいんだぞお!!」

飛びかかってきたナツを抑えて話を聞くには、

ルーシイの「家に帰る」という言葉をナツ達が早とちりして、それが他の仲間を巻き込んで一騒動になっていたらしい。

システイはその話を聞いて苦笑を浮かべ、ルーシイを見つめる。

「ルーシイ…災難だったね…」

「ホントよ、もう…」

こちらも苦笑を浮かべ、ヤレヤレといった表情を浮かべた。

「そう言えばシステイ、これからどうするんだ？」

またまた言い争うナツとグレイをなだめるシステイにエルザは問いかけた。

「一応、まだ完治していないからポーシユシカさんの所でしばらく過ごすつもり。あそこ、空気がおいしいんだよねえ」

そう言うと、システイはニヘラと笑う。

「そうか。なら、それからか」

「うん。ウエンデイを探しに行くよ」

「なんだア?なんの話してんだ？」

エルザとシステイの深刻な顔を見てか、ナツが素っ頓狂な声をあげた。

「ナツ。私、ポーシユシカさんの所から帰ってきたらしばらくギルド

を開けるから、その間はよろしくね」

「ん？おう、任しとけ」

分かっていないことは目に見えているが、話すのも面倒なので、システイはそのまま放置しておいた。

どうせ、帰った時に怒鳴り散らしてくるだろうけど…。

その光景を想像して、システイは誰にも気づかれずにクスリと笑った。

竜の顎編

24. 戦姫の休養

「ん〜やっぱりここは気持ちいいなあ」

システイは両手をグツと伸ばし、大きく伸びをする。

システイがいるのは、フィオーレ王国の人里離れた森の中。そこには妖精の尻尾の顧問薬剤師でマカロフの古い友人である治癒魔導士のポーリユシカが暮らしている。

システイはそこに療養とリフレッシュを兼ねて来ていた。

「やっぱりここはエーテルナノが豊富だね」

「まあ、これだけ街から離れてたらそれもそうでしょ」

森の中には二人の声以外に人気は感じられず、まるで世界から切り離された場所のように感じた。

しかし、

「っ!？」

ほんの一瞬だけ魔力を感じた。しかも、ジョゼのように禍々しくも、マカロフのように優しくもない、言うなれば無色の魔力だ。システイには逆にそれが不気味だった。

システイは魔力を感じた方に視線を向ける。しかし、視線の先には森が広がるだけだ。

「……行ってみるしかないか……」

システイは意を決して森の奥へと歩き出した。

歩き始めて数分、先に異変に気づいたのはシェリルだった。

「…なんか、ちよつと静か過ぎない?」

「…動物が…いない…?」

さつきまで鳥の鳴き声や、風の音が溢れていたが、今では一切が無くなっていく。

何かいる。そう思わずにはいられなかった。

生い茂った草木をかき分け少し開けた場所に出ると、そこは小さな

湖だった。水は澄んでいて、魚も何匹か泳いでいる。

そして、目線を湖から離れた時、彼が目に入った。

黒い髪に漆黒の瞳、黒い装束と全てが黒で染められている。

向こうもこちらに気づいたのか、ゆつくりと顔を上げられ、目が合う。

その瞬間、システイの本能が危険を告げ、即座に距離を取った。

「貴方は…いったい何者…?」

「僕かい…? 僕はただの旅する魔導士さ」

「嘘。さつき感じたあの魔力、貴方は只者ではないはず…」

「…確かにそうだね。それじゃあ改めて名乗ろう。僕の名は、ゼレフ」

「ゼレフ…!? 貴方があの魔法界の歴史上最も凶悪だったと言われる黒魔導士の…!」

システイは即座に構え、魔力を解放した。

「その魔力…グランディーネの子か。ウエンデイ…いや、システイだったかな?」

「っ!? 貴方、どうして私の名前を…」

「…さあ、どうしてかな? とにかく、僕は戦う気なんてないから魔力を抑えてくれないかな?」

実際、システイが魔力を解放してなお、魔力を出すどころか動こうとしない。

しばらくは警戒していたが、結局システイの方が根負けして魔力を収めた。

「ねえ、貴方歳は幾つなの? 一体どれだけの時間を貴方は生きているの?…」

「歳…か。そんな概念もう忘れたよ。」

「…システイ、君はなぜ人は歳を数えると思う?」

僕はね、死ぬまでの時間を逆算する為だと思っただ。

でも、僕には死は訪れない…。だから、三十を超えたあたりから数えることを辞めてしまったんだ…」

「不老…不死…」

『『アंकセラムの黒魔術』っていう古い呪いなんだ』

システイはそれを知っていた。

人を尊いと思えば思うほど人を殺めてしまう矛盾の呪い。

それは自分の意思とは関係なく周囲の生命を一瞬にして枯渇させる。

「だから、僕にはあまり近づかない方がいいよ」

そう言っつてシステイに向ける笑顔は、とても悲しく苦しそうなものだった。そして、その笑顔が、昔ナツが幼なじみを亡くした時に見せた作り笑いとなぜか重なり、システイは無意識に手を伸ばしていた。

「っ!？」

「ごめん。私にはこれくらいしか出来ない」

システイは風を操り、優しく彼を包み込んだ。

「…久しく忘れていたよ…。これが、人の温もりなんだね…」

ありがとう、システイ…」

ゼレフが見せた笑顔は、さっきのは違って優しく柔らかいものだった。

「さて、僕はもう行くよ。ここらの草木を枯らす前に」

「…お元気で」

ゼレフはそのまま一度も振り返らず去っていった。

彼が去った後、森は思い出したように活気を取り戻す。

システイはまた彼の去った方向に視線を向けた。

「最悪の黒魔道士ゼレフ…か」

システイは呟くと、そつとシエリルを抱き上げた。

「戻ろっか」

「うん…」

システイはシエリルを抱いたまま、丁度ゼレフの去った方向とは逆に進み始めた。

二人がポーリユシカの元に戻ると、そこにはなぜかミストガンが来

ていた。

「あれ？どうしたの、ミストガン？」

「……システイか。ちよつと野暮用でな……」

そう言つて、ミストガンは顎と目線で遠くに見える大きな木を差し示す。ミストガンが二人きりで話したい時によく使う仕草だ。システイは黙つて頷くと、シエリルに断つて一人でその木に向かった。

「それで話つて？」

「…お前が『ウエンデイ』という少女を探していると聞いた…」

「うん。そうだけど…？」

「……その少女の名前、『ウエンデイ・マーベル』か…？」

「っ!?なんで…どこで聞いたの!?!」

システイはギルドのみんなに彼女のフルネームを教えるてはいなかったはずだ。少なくとも彼には教えたことがない。

「まさか、会つたの…？」

「ああ…。だが、随分昔のことだ…。俺は彼女を化猫ケットシエルターの宿というギルドに託した」

「そう…よかった」

システイは心から安堵していた。ギルドに保護されているなら、余程のことでもない限り無事であるだろう。

「ありがとう、ミストガン」

「いや…もつと早くに言えばよかったな…」

「ううん、教えてくれただけで十分だよ」

「すまん…。無事再会出来ることを祈つてる…」

「そう言い残すと、ミストガンは去つていった。

「本当にありがとう…」

システイは感謝を込めて彼に向けて頭を下げた。

それから三日ほど経ち、システイの怪我も完璧に治つていた。むしろ、怪我する前よりも調子がいいくらいだ。

「さあ、治つたんなら早く出ていきな」

「もう…分かったから。…ありがとね、グランディーネ」

「その名で呼ぶんじやないよ。…：…もう、あんまり無茶はしないことだね」

「分かってるよ。じゃあ、行くね」

そう言っつてシステイはポリーリユシカの元を後にした。

もし、ウエンデイをここに連れてきたら、どんな反応をするだろう…。

そんなことを考えながら、システイは妖精の尻尾に向けて足を進めた。

25. 出会い

マグノリアに帰る途中、システイはベスネルクという街に立ち寄っていた。そこは魔法具の製造や売買が盛んな街として賑わっており、フィオーレ王国の中でも有名な観光スポットにもなっている場所だ。システイとシェリルは、そこへお土産を買いに来ていた。

「何か面白い魔法具おもちゃとかないかなあ？」

「誰かにあげるの？」

「ナツにね。ほら、どうせ私がギルドを離れるって言ったら怒ってくるだろうから機嫌直しにね」

そう言って、至るところの魔法具を物色する。しかし、イマイチなものばかりでどれもいいのかわからず迷ってしまう。

「もうこれでいいんじゃない？ スイッチを押すと電気が流れるドツキリ用魔水晶ラクリマだつて」

「それ、逆に怒られそうだよね…」

そうやって色んな店を回っているうちに空が暗くなり始めてしまい、仕方なくシステイはこの街に一泊することにした。

夜も更けて街の明かりも少なくなつた頃になつても、システイは未だに寝られずにいた。

外の空気を吸うために、シェリルを起こさないよう静かにベランダへ出ると、外の空気は冷たく、心地いいものだった。

「…ウエンデイ…」

システイは静かにその名を口にする。

眠れないのは、彼女の事が原因だった。

今まで、最悪のことも有り得るため意識的に考えずにいたが、ミストガンからギルドに保護されていると知って、居ても立ってもいられなくなっていた。

「ちよつと頭冷やさないとなあ…」

システイはベランダから街を眺める。

この宿は少し宿泊代が高い代わりに眺めがよいと評判の宿だ。二

階ともあつて、その眺めは素晴らしい。

すると、近くの裏路地に全身黒衣でフードを深く被った集団が目に入った。人数はだいたい二十人程度。キョロキョロと辺りを見渡し、何かを探している雰囲気だった。

「何だか一悶着有りそうね…」

システイはニヤリと笑うと、ベランダから宿の屋根に飛び乗り、上から尾行を始めた。

「はあ……はあ……はあ……」

少女は裏路地の影にしゃがみ込み、追っ手から身を隠していた。

バタバタと足音が近づき、自分を血眼になつて探しているのが嫌でも分かる。

そして、足音は結構近い所で止まった。

「おい、いたか？」

「いや、こつちじゃない」

「クソツ、どこに行きやがった…!？」

コツコツと二人の足音が離れていく。同時に肩の力が抜け、その場からゆっくり離れようとしたその時、足元にあつた空き缶を倒してしまった。

カラカランという音が裏路地に響き渡る。不味いと思つた時には既に少女は走り始めていた。後ろから「居たぞ!!」という声があがるが、気にせず少女は走り続ける。

そしてそのまま走り続け、街の中心にある広場に出た。広場には別の路地に繋がる道が五本もある。これでまた時間が稼げるだろう。

しかし、それが奴らの作戦だった。

「しまった…」

広場から別の路地に入る道から次々と奴らが出てきて、道が完全に塞がれてしまった。

「随分手間かけさせてくれたなあ、この小娘が…」

後ろを振り向けば、さつきから追いかけてきた二人組が後ろの道を

塞いでいる。

これで逃げ場は完全に無くなり、少女は止む無く臨戦態勢に入る。

「さあ、もう逃げ場はない。大人しく渡せ!!」

「嫌!!これは父さんから預かった大切な物よ。あんた達になんか渡すもんか!!」

少女は叫びながら敵の数を確認する。

大丈夫。五人程度ならなんとか…。

しかし、そんな希望は即座に裏切られた。

「ならば仕方ない…」

塞がれていた道からゾロゾロと仲間が出てきて、少女を取り囲む。これでは隙をついて路地に逃げ込むこともままならない。

「くっ…」

「…十分痛みを与えてから奪い取れ」

リーダー格と思われる男の指示で、一斉に奴らが少女に向けて飛びかかる。

やるしかない…。

少女もやむを得ず魔力を解放し、首から掛けられた牙のような飾りに軽く触れた。すると、ほんの一瞬だけその首飾りが光った。

「テンペスト!!」

暴風を生み出し、一番近くにいた三人を上空に吹き飛ばす。次に懐から小太刀を抜き取り斬撃を防御、股下を潜り抜けて 距離をとる。

捌ききれない…。

ほんの数秒で、そう実感させられた。

少女自身の実力不足もあるが、圧倒的な数の差の前にどうすることも出来ない。

さつき吹き飛ばした三人も、何事も無かったかのように立ち上がり、少女を壁へと追い込んでいく。

「くはっ…」

壁に叩きつけられ、堪らず膝をつく。

奴らはまるでいたぶるようにゆっくりと近づいてくる。

もう、駄目だ…。

少女はまるで継るように首飾りを強く握り締めた。
すると、戦闘を歩いていた奴らのうちの一人が急に振り返り、仲間を殴り飛ばした。

「え……」

「くっ…何しやがる!？」

「てめえ裏切るのか!？」

仲間達からさまざまな怒号が放たれるが、その一切に応じずに刀を構えた。その行動を見て仲間達もそいつを完全に敵と見なし、全員で襲いかかった。

少女はその戦闘を眺めながら、その一方的な状況に目を見張った。さっきの自分と同様に、一人で何人も相手してしているにも関わらず、攻撃を全て回避している。逆に、カウンターとして放たれる攻撃を誰も回避できず、一人また一人と意識を刈り取られていく。

結局、数の利を完全に覆して全員を倒してしまった。

「ふう…あんまり手応えなかったなあ…」

そう言って被っていたフードを取り去る。すると、隠されていた白銀の髪が月光を反射して美しく輝いた。

「…ねえ、大丈夫?」

「あ、はい…」

「そ、よかった」

そう言うと、彼女は少女に向かって微笑んだ。

それが、少女と妖精の戦姫の出会いだった。

26. 竜の顎

「大丈夫?」

「え、あ、はい……」

システイは倒れたまま自分を見上げる少女に、手を貸して立たせてあげる。少女は手を借りながらも、どこか警戒した目でシステイを見ている。どうやら、敵の仲間の格好をしているのが逆に警戒心を強めているようだ。

「あの、貴方は一体何なんですか?」

「何って言われてもねえ……。とりあえず、場所移そうか。こいつらが起きたら厄介だし」

「……じゃあ、こつちです……」

そう言う少女の後にシステイは続く。少女はまだシステイのことを警戒しているようで、二人の間には少し距離があった。

「……ここです」

到着したのは街の外周近くにある錆びれた宿屋。中に入ると、木が腐ったような独特の匂いが鼻をついた。

少女が借りているであろう部屋に入り、システイはベッド、少女はイスに腰掛ける。

「それで、貴方は何なんですか?」

少し落ち着いた所を見計らって、さつきと同じ質問がシステイに投げかけられた。

さつきも思ったが、漠然としすぎた質問のせいでシステイは回答に困ってしまう。

「何って言われてもねえ……」

とりあえず、私の名前はシステイ・トワイライト、魔導士よ。ギルドは妖精の尻尾フェアリーテイルに所属しています。

「……こんな感じでいいかな?」

肩に印されたシンボルマークを見せながら言ったが、少女は首を傾げるだけだ。

「……もしかして、妖精の尻尾って聞いたことない?」

「すみません……。私、世間に疎くて……」

「そっか……。まあ、そういう魔導士ギルドって理解してくれればい
いよ。」

「……じゃあ次はあなたの番だよ。名前、何ていうのかな？」

「私は、エリナ・ルーエルといいます。父は魔法具職人をやっていて、
私はその跡継ぎとして修行しています」

「へえ、魔法具の……」

「……あの、ホントにあの人達と関係ないんですか？」

「ないよ、これっぽっちも」

システイは即答するが、少女―エリナはまだ信用しきれしていない感
じだ。

システイも、今になって敵の仲間を装って助けたことを後悔してい
た。

「……それで？追われている理由に心当たりはあるの？」

「……多分、これです……」

エリナは首に掛けられた物を外し、システイに手渡した。それは、
何かの牙のようなただの首飾りだった。何か特別な物のような感じ
は全く見られない。

「へえ……これは何の牙なの？」

「……父は、ドラゴンの牙だと推測しています」

「……えっ!?ドラゴンの!?!」

システイは手の上にあるそれを凝視するが、明らかに牙というより
は爪のような大きさだ。少なくとも、グランディーネの牙はこんなに
小さくは無かった。

「……でも、ドラゴンの牙にしてはちよつと小さすぎない?」

「そう推測する理由は形よりもその能力の方です。」

それに魔力を流し込んだり接触させると魔力を蓄え、またその魔力
を使つて魔法を発動することもできます。

その能力が滅竜魔法と似ていることから、ドラゴンの牙改め、
竜の顎あごと名付けられました」

確かに魔法を喰らう点は滅竜魔法と似通つていると言える。それ

に、蓄えた魔力を使って魔法を発動出来る能力は稀少で欲しがらる輩も多いだらう。

「なるほどね。それで狙われてたって訳か」

「はい……」

「そう……で、目的地は？」

「へ……？」

突然のことにエリナは呆けた顔をする。

「だから目的地だよ。こうして会ったのも何かの縁だし、近かったら目的地まで送ってあげる」

「でも……いいんですか？」

エリナもさっきの戦闘でシステイの底の見えない強さを知っている。送ってくれるならそれに越したことはないだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

でも、実は目的地はないんです。どっちかって言うとな探して……

「そうなの？……じゃあ誰を探してるの？」

「滅竜魔導士です。父が、竜の顎を研究するのに会ってみたいらしくて」

「じゃあ目的達成ね。私、滅竜魔導士だし」

「ええっ!? ホントですか!？」

エリナは突然立ち上がり、目をキラキラさせながらシステイの体をペタペタ触る。触診でもしているのか、触りながら「特にヒトと違った所は無いな……」などと独り言を言っている。全く、滅竜魔導士を何だと思っっているのだろうか……。

「えつと……」

「あ、すいません……。ちよつと興奮しちゃって……」

エリナは恥ずかしさのあまり顔を赤らめる。それでもまだ触りたいというような顔をするエリナにシステイは呆れてため息をついた。

「まあ、別にいいけどさ……」

「じゃ、遠慮なく!!!」

「えっ!? ちよつ、そういう意味で言ったんじゃ……うわっ」

システイはベッドに押し倒され、完全に理性がとんでるエリナに至

るところを触られ続ける。同性なのをいいことに、宣言通り遠慮と言
うものが一切無い。

「うわあ…肌スベスベ…。ここはプニプニだ〜」

「ちよつとどこ触ってんの!!」

「フワフワプニプニ〜」

「キヤツ!?もう、離れない!!…:さきもないと…」

「キヤツ!?くすぐった〜い!!」

エリナの触診はいつの間にかくすぐり合いに発展し、出会った頃が
嘘のように打ち解けていた。そして、二人とも力尽き、抱き合ったま
ま狭いベッドで眠りに落ちた。

そうして夜が深まっていく。一匹の猫の存在を忘れながら…。

「ごめん、シエリル!!本当にごめん!!」

「システイのバカ!!私がどれだけ心配したと思ってるの!!」

今朝方エリナの宿で目を覚ましたシステイは、シエリルを宿に置い
てきたことを思い出し、既に起きていたエリナを連れて宿に戻り、今
に至っていた。

「シエリル、ホントにごめん!!」

「…:わかった。その代わり一つ貸しだから」

「う…:…:わかった…」

ちなみに二人の間で貸し一つは結構大きかったりする。

貸し一つで何でも一つ言う事を聞くという、言ってしまうえば絶対命
令権だ。システイの場合、性格上貸しを作ることが多く、しかもシエ
リルは中々それを使わないので、貸しは貯まる一方だった。

「えつと…:…:今貸し幾つだっけ…」

「今回で貸し十。そろそろ貸し全部使って、フィオーレ一周の列車ツ
アーに十回連続で行ってもらおうかな〜」

「それだけは勘弁して!!死んじやう!!ホントに死んじやうから!!」

結局システイは何とか列車ツアーを回避し、シエリルもまた貸しを
保留とした。

話が一段落ついたところでシステイはエリナを紹介する。

「さて、遅くなったけどこの子はエリナちゃん。昨日色々あつて西にあるエステイアまで送るになったの」

「色々ねえ……。私はシエリル。よろしくね、エリナ」

「エリナ・ルーエルです。こちらこそ、よろしくお願いします」

二人の挨拶が済み、ようやくエステイアに向けて出発する。

まだ行ったことのない街に期待を膨らませながら、エリナを加えたシステイとシエリルの旅が今始まる。

27. 波乱の道中

ベスネルクを出発した二人と一匹は、途中で馬車に乗り込み、少しずつエステイアに向けて進んでいた。このままのスピードで行けたら、エステイアまでは一日も有れば着けるだろう。もともと、この馬車はエステイアまでは行かないため、途中からは徒歩になってしまいが。

少女にとつては馬車に乗るのは初めての体験のようで、乗ってからしばらくは楽しそうに辺りを見渡していた。しかし、今となっては乗り物酔いで苦しむシステイを前に、楽しむに楽しめない状況になっていた。

「うぷつ……気持ち悪い……」

「あの、大丈夫ですか……？」

「大、丈夫……。いつもの、ことだから……」

本人はそう言っているが、エリナから見たら全くそうには見ええない。こんな弱点丸出しで大丈夫なのか、と正直疑ってしまう。

「大丈夫。システイはこれでも聖十大魔道に招待されるほどの実力者だよ」

「せいてん……う……それって凄いですか？」

「……世間知らずもここまでくると呆れるしかないね……。いい？聖十大魔道っていうのはね……」

シエリルが説明を始め、エリナも熱心にそれを聞いている。そんな様子をシステイは乗り物酔いに苦しみながらも眺めていた。

あの小さかったウィンディも、今頃エリナくらいの身長に成長しているのかなあ……

ワイワイ楽しそうにする二人を見てシステイは優しく微笑んだ。

しばらく進んでいると、突然馬車にブレーキがかかり停止した。だが、システイ達が乗せてもらえるよう交渉した場所にはまだまだ遠いはずだ。二人も今の状況に違和感を感じ、警戒して話すのをやめて黙

り込む。システイも、持っていた薄茶色のフード付きケープを羽織つて妖精の尻尾のシンボルマークを隠し、ついでにフードで顔を隠す。外から山賊らしき男が入ってきたのはその直後だった。

「テメエら、外に出ろ」

銃型の魔法具を突きつけられ、やむなくシステイ達は男に従う。

外に出ると馬車の周りを二十人以上が囲んでおり、ほとんど全員が同じ魔法具を手にしていた。

「あれ、王国軍用に開発されたパイソンシリーズの七型です。射程は三十メートルと短いけど、その分威力は強力です」

エリナが隙を見計らってシステイに耳打ちして教える。システイにとつて情報の有無は大した勝因にはならないが、戦いやすくなることは事実だ。システイは得た情報を元に戦闘をイメージする。

すると、リーダー格と思われる男が空に向かって魔力弾を撃ち上げ、高々に言い放つ。

「よしテメエら、手荷物を含む金品を全部寄越せ!!」

いくつもの銃口を向けられ、御者さんも仕方なく積荷を下ろして差し出す。システイ達は竜の顎あぎとを除いて貴重そうな物は持ってなかったし、竜の顎自体もただの爪か牙にしか見えないためそのまま立ち尽くしていた。しかし、そのせいで山賊達の目に留まってしまった。

「おいそこの女二人、こっちに来い」

「…分かりました……」

エリナが怯えた様子で頷き、システイも続いて男の元へ歩み寄る。男の前に立って早々にシステイはフードを取られ、素顔が露わになる。控えめに言っても美人すぎるシステイを山賊が気に入るのは当然のことだった。

「……ほう……。中々上玉じゃねえか。放つとくのは惜しいなあ」

男はシステイの顎を押し上げ、気味の悪い笑みを浮かべる。だが、そのせいで男はシステイの怒りを買った。

「汚い手で触れるな」

「グハッ…!?!」

思わず本気の正拳突きを放ち、男は軽く10メートルは吹っ飛ぶ。

仲間が呆けているうちにエリナを背負い、御者さんを背後にして守る。

「ダメエ、タダで済むと思うなよ!!!」

山賊達は半円を作るようにシステイ達を囲み、銃を構える。

逃げ場のないこの状況の中、ただ一人システイだけが余裕の表情を浮かべていた。

「死ねえ!!!」

「天竜の旋風!!」

放たれた魔力弾は全て上空へと吹き飛ばされ、消滅する。そんな想定外の光景に一瞬の硬直が生じ、システイは一気に突っ込んだ。

崩れた陣形はただ自分達の首を締めるだけで、システイは敵を誘導して同士討ちを誘発させたり、軌道をずらして敵に当たったりして敵の数を減らしていく。相手もこのままでは不味いと感じたのか、攻撃を近距離に変更し接近してくる。しかし、狙って撃つだけの遠距離戦闘とは違って近距離戦闘では相応の技術が要するため、逆に一瞬で残りが片付いてしまった。残るはリーダー格の男ただ一人だ。

「さて、そろそろ何が目的か話して貰おうか。あ、もちろん戦いたいなら相手するよ?今度は手加減しないけど」

「……聞くら聞け。答えられる範疇なら答える」

「そ、じゃあ遠慮なく……」

誰に頼まれてこの馬車を襲ったの?」

システイ達が乗っていた馬車は、荷台が小さな馬車で荷物も大して積んでいないのが外から見ても分かる。それなのに襲われた。しかも、山賊達は過剰と言えるほどの装備を揃えている。裏で糸を引いている奴がいると推測しても何も不思議はない。

そして、やはりシステイの推測通り黒幕が存在した。

「……ラーガスという名の男だ」

「えっ!?!」

「ん?知ってる人なの?」

「はい……。本名はラーガス・グラルフ。エステイアでは父の次に有名な魔法具職人です」

「なるほどねえ…」

狙いは確実にエリナの持つ竜の顎だろう。竜の顎は今の所世界に一つしかなく、魔力の貯蔵と放出という機能は何にでも応用可能だ。もしそんな竜の顎が複製されでもしたら、ルーエル氏の優位が確実なものとなってしまふ。ラーガスは恐らくそれを嫌ったのだろう。

「……貴方のお父さんが心配だなあ……。ちよつと急いだ方がいいかも……」

人質にとられているなんて事もありえないことはない。

エリナも同じことを考えていたのか、システイの言葉に大きく頷くと二人は馬車に乗り込み、再びエステイアに向けて進みだした。

「父さん……無事でいて……」

まだまだエステイアまでは遠く、今はただ待つしかできない。馬車の速度にもどかしさを感じながら、エリナはただ祈り続けるのだった。

28. 対峙

約束の場所で馬車を降り、残りは自分達の足で歩くこと約二日、ようやく目的地のアステイアが見えてきた。ベスネルクからはだいたいの五日程の長旅だったが、街に着いたら休んでいる暇はないだろう。隣を歩くエリナもどこかソワソワしている感じた。

アステイアの門を潜ると、エリナは待ち構えていたように走り出す。目的地は言うまでもないだろう。システイもエリナの後を追う。ショートカットするためか大通りを素通りし、裏路地に入り込む。裏路地はあまりにも入り組んでいるためシステイは仕方なく上から追跡する。そして、町の中心から少し離れたところにある建物の前でエリナは足を止めた。

「……ここがそうなの？」

「はい……。ここがお父さんの工房です」

何というか意外だった。街を代表する魔法具職人のはずなのにその工房はボロボロで小さい。街の真ん中にある大きな工場がそうだと言われた方がまだ信じられた。

「……へえ〜てつきりあそこなのでつかい工場なのかと思ってた」

「あそこはラーガスさんの工場です。あそこは大量に生産して安さを売りにしてましたから」

「それが、安定した売り上げをもたらすのだよ」

「っ!?!」

振り返ると、そこにはいかにも悪巧みをしてそうな男が立っていた。背後には帯刀している護衛が二人控えてさせており、変に手出しはできないようにしている。

「よく帰ってこれたな、エリナ・ルーエル。父親に似て運だけは強いよ
うだ」

「お父さんに何もしてないでしょうね!?!」

「ああ……今のところは、な」

「くっ……」

「取り引きだ。俺はお前らに手出ししない。その代わりに、お前の持つ

ている竜の顎を渡せ」

こちらが断れないことをいいことにそんな条件を提示してくる。竜の顎を渡すわけにはいかないが、この状況では他に方法はない。エリナは仕方なくラーガスに向けて竜の顎を投げ渡した。ラーガスは念入りに本物かチェックし、それが本物だと分かると、顔を気味の悪い笑みで歪めた。

「クツクツク…。確かに受け取った。これでお前らに用はねえ。親子仲良く死んでもらおうか」

「なっ…!? どうして!? 約束と違う!!」

「約束? ……ああ、確かに言ったな。俺は手出ししない、つてなあ」

そう言うのと、ラーガスは踵を返し建物の影に姿を消した。それを黙って見送った護衛二人はシステイ達に向き直ると、刀を勢いよく抜き放く。その刀身は紫色で禍々しい雰囲気を放っている。恐らく、何かしらの効果を持った魔法具なのだろう。

剣先を向けられてはシステイも黙っておらず、エリナを守るように前に立つ。三人の視線が交錯し、そしてほぼ同時に地面を蹴った。

「天竜の鉄拳!!?」

先手はシステイ。先行する一人に向けて拳を放つ。対する相手は刀の腹で防御しにかかるが、滅竜魔道士ドラゴンスレイヤーの攻撃に対してその対応は愚策だ。滅竜魔法をあの細い刀身で受けたら破壊は免れないだろう。

しかし、蓋を開けてみれば刀を破壊どころか罅一つ付けられず、逆にシステイの左手が刻まれていた。

「くっ…その刀…」

「ああ。銘は叢雲むらくも。魔を絶ち祓う剣だ」

「なるほどねえ…。つまりそっちの剣もそういうやつか」

「…銘を十握剣とつかのつるぎという」

この状況に流石のシステイも面倒な相手だと思わずにはいられなかった。

あの魔法が効かないという能力は、さっきのような防御だけでなく攻撃にも利用できる。鎧のように纏った風を簡単に引き裂いてくる。―引き裂くというより霧散させられていると言うべきか―魔法での

攻防が意味をなさない今、システイはただ避けるしかできない。

避けるのは訳ないけど魔法が効かないのは厄介だなあ…。

システイは避けながら反撃の糸口を探すが中々有効的な手段が見つからず、結局今も攻めあぐねている。

「システイさん!!」

そんな時に工房の方から大きな声で呼ばれ、システイは戦闘の最中ながらも視線をそちらに向ける。すると、工房の方からエリナがこちらに向けて何かを投げるところだった。

「これ、使ってください!!」

二人から大きく距離をとって投げ渡された物を手に取る。そして、それを反射的に抜き放った。

「へえ…いい刀だね」

投げ渡された物は刀身が白く透き通った刀だった。これも魔法具なのか、二人の持つ剣とどこか似た雰囲気を感じる。

「銘は天羽々斬。魔力を散らすことは出来ませんが、切れ味と魔力伝導性は抜群です!!」

エリナの言った通り、魔力を流し込むとまるで自分の体のようにすんなりと風を纏わせることが出来た。これに刀本来の切れ味が加われば、ほとんどの物は簡単に斬れそうだ。

システイは左腕の傷を治し、柄を両手でしっかりと握る。

「じゃあ、そろそろ反撃開始といきましょうか!!」

システイは地面を蹴り、思い切り刀を振るう。相手も刀で迎え撃ってくるが、気にせず振り切る。すると、全く抵抗を感じずに刀は切断された。まるで空振りをしたかのように斬った手応えが全くない。異常なほどの切れ味だ。それに、刀身に負荷がかかっている様子もない。

「これならいけるかも……」

システイには長らく封印していた技がある。その技は風の付加以上、刀に負荷をかけてしまうため、どんな刀でも壊れてしまうのだ。だけど、この刀なら少なくとも一回は耐えられるかもしれない。システイは刀を鞘に収め、これまで以上に魔力を流し込む。

「ッ^{アイ}研ぎ澄ませ」

鞘の中の刀に風が集まって行くのが鞘を持つ左手を通して分かる。しかも負荷が全くかかっていない。自分の魔力を全て流し込んでも耐えられそうだ。だが、今度は逆にシステイ側の技量が試される時だ。限界まで切れ味を強化されたこの刀でなら何でも両断してしまう。だから殺さぬように調整する必要がある。

「まさか、刀に試されるとはなあ…」

システイは静かに腰を降ろし、相手を見据える。無駄な力を抜き、抜刀する瞬間に備える。相手を見て、その動きに合わせるように刀を引きぬく。

ギユイイイン!!!

システイが刀を振り切った後から途轍もない轟音と衝撃波が発生する。流石にこの刀にも負荷はかかったようで、少し刃が欠けていたがその程度だった。あと三回は難なくやれそうだ。そして相手の方も、刀を綺麗に三等分し、本人の方も致命傷を避けている。久しぶりなのに鈍ってなくてよかった。

「貴方達はその刀の性能に頼って剣技の方が疎かになってる。そんなんじゃ貴方達は刀に使われてるだけだよ」

「……最後の一闪、全く見えなかった。あれも剣技なのか…?」

「そう。私が編み出した抜刀術の奥義、『幻月』^{げんげつ}。二撃目は音速を超え、三撃目以降は光速に迫る速度になる。刀の限界を無視すれば六連撃くらいは何とかいけるでしょうね」

「そうか…。俺も、まだまだということか…」

そう言つて男は静かに地に伏した。システイはそれを見届け、そつと刀を鞘に収めた。集中が切れたためさつきまでの疲労感が一気に襲ってくる。けどまだ全部が終わったわけじゃないのでそんなに休んではいられない。

「エリナちゃん、これありがとね。助かったよ」

「いえ、私に出来ることなら何でもしたいんです!!」

「じゃあこの刀の手入れお願いできる? さつきのでだいぶ消耗してるから」

「はい！…でも時間が…」

「大丈夫。ゆっくりでいいから完璧にして手入れして」

「はい、わかりました！」

大事そうに刀を持って駆けていくエリナを見送り、彼女が工房に入ったところでシステイは立ち上がった。

「やっぱ置いていくんだ」

「うん。シエリルはあの子の傍にいてあげて」

「…分かった。でもよかったの？ 刀預けちゃって。相手は竜の顎あぎとを持つてるのよ？」

シエリルの言う通りで、この戦いは刀を使った方が断然楽だ。さっきの二本の刀は魔法を霧散させるだけだったが、竜の顎は魔法を喰らい、自身の魔力としても使うことができる。魔導士には相性の悪い敵だ。

「いいんだよ。正直一発ぶん殴らないと気が済まない。なるべく刀の整備が終わるまでには戻るよ」

シエリルの頭を優しく撫で、システイはラーガスの工場に向けて歩き始めた。一人歩くシステイの瞳には一切の慈悲もなく、純粹な怒りだけが宿っていた。

29. 決戦

特に妨害もなく正面から堂々と工場に入り込んだシステイはほとんど素通りで最深部まで辿り着いた。そこはどうやら魔法具の倉庫のようで、いろいろな魔法具が積み上げられていた。魔法具の山を通り抜けてさらに奥へと進むと、暗い部屋でラーガスが待ちかまえるかのように立ち塞がっていた。

「ようこそ、愚かな魔導士殿」

「敵を招き入れるなんて随分余裕そうね。護衛二人を倒された今、貴方の盾はもうないのよ?」

「ハハハ、あいつらは形だけの護衛だ。第一、人間など信用できない。すぐに嘘をつき、裏切る。その点、発明品は裏切ることは無い」

「信じられるのは自分の魔法具のみってわけね。ホント、悲しい人」
「口うるさい奴だ。…丁度いい。お前には新兵器の実験台になってもらおう」

ラーガスがボタンを押すと同時に床から何かがせり上がってくる。暗くてよく見えないが、シルエットから人型のように見える。ガタンと音を立ててリフトが止まると、今度はガシヤンガシヤンとまるで鎧が歩くような音を立てながらそれが動き始めた。

「これが新兵器、『パラディン』だ。」

姿を現したのは盾と剣を持つ騎士の鎧。しかも、鎧の魔法具ではなくあれ自体が自律した魔法具なのだろう。人の気配が一切感じられない。鎧と盾と剣の全てが何らかの効果を持った魔法具だと考えて戦った方がよさそうだ。

「さて、性能チェックだ。行けパラディン!!」

命令を受けてまっすぐ突っ込んでくるパラディンに対してシステイはすぐさま構えを取って動きを観察する。とりあえず最初はこちらからの攻撃は控えて、相手の行動と攻撃のパターンを分析する。中に人が入っている訳ではない為、パラディンの行動には何らかの規則性があるはずだ。それが大体把握できれば次は防御。パラディンが取れる行動は防御、回避、カウンターの大きく分けて三つだ。把握

するのはそう難しくない。そして最後に魔法に対する行動だ。奴が相当な馬鹿でない限りあれを仕込んでいるはずだ。

「天竜の翼撃!!」

予想通り盾によって防がれた魔法は全て吸収された。どうやら竜の顎は盾に埋め込まれているようだ。これだとダメージを与えるには盾を搔い潜って直接攻撃するか、盾を奪うしかないだろう。だが、盾はパレデインの腕と完全にくっついているため、ここは前者の作戦で行くしかない。幸い、奴の行動パターンは解析済みだ。うまく相手の盾で出来た死角に入り込んで一撃を狙う。

「天竜の鉄拳!!」

技はしっかり胸元にクリーンヒット。しかし、鎧は少し凹んだ程度でダメージがあまり通っていない。そこまで堅そうにみえないのになんで…。

「盾を避ければダメージを与えられるとでも思っていたのか？パレデインを甘く見てもらっては困る。そいつの鎧には高い魔力伝導性があつてな、鎧を通じて魔力を吸収できるのだ」

「解説どうも。でも、確かに厄介ね…」

ラーガスの言う通り鎧への攻撃もあまり効果的ではない。さっきの鉄拳も魔力を吸収されて精々凹ませることぐらいしかできていない。こちらの攻撃が全くいかなない為完全に打つ手がなくなつた。

「どうだね、私の最高傑作は？」

「確かに倒すのは難しいけど、正直負ける気はしないわね」

「ほう？ならば…パレデイン、バーストモード」

『コマンド確認、バーストモード』

盾からまるで血管のように赤い線が延びて鎧が赤く染まる。直感的にあれはヤバいと感じ、構えた時には奴は魔横にいた。

「えっ、うぐっ!?!」

思い切り蹴飛ばされ、壁に激突する。間髪入れずに剣が突き刺されるのを紙一重で躲し、何とか距離を取る。パレデインの方は勢い余つて壁を破壊し、瓦礫の下に埋まっている。だが、時間稼ぎにもならないだろう。

「何？あの速度とパワー…。吸収した魔力を身体強化に使ってる？」
「ご名答。だが、それだけじゃあない」

すると、瓦礫の隙間から光が漏れ出し、それは次第に強くなってくる。この光り方、まさか魔法!?!?

『フレイムバースト』

爆音と共に炎の渦が一気に瓦礫を吹き飛ばす。しかも、放たれた炎は再び盾に吸収されていく。

「永久機関とまではいかないが、こういう風に自身が使った魔法を吸収して魔力消費を最小限に抑えることもできる。どうだ？これでも負ける気はしないか？」

「くっ……」

パラディンのことは、所詮魔法が効かない魔導兵器だと甘く見ていた。それに、ここまで手こずるなんて一切考えてなかった。

ちよつと調子に乗ってたな…

戦姫なんて呼ばれて、さらには聖十大魔道に誘われたことで完全に調子に乗っていた。油断は隙を作り、隙は死を招く。システイ自身がナツやグレイに何度も言ってきたことだ。自分が油断してどうする!?!?

「……ナツなら、どうやって切り抜けるかな…」

『魔法が効かなかつたら？んなもん素手で殴りゃいいんだよ』

「ふふっ。ナツならきつとそう言うだろうね」

シルフィはポツリとつぶやくと、パラディンに向けて拳を構えた。

無駄な思考は要らない。ただ、自分の全力をぶつけるだけ。

「止めだ。いけ、パラディン!!」

「これで決める…」

システイは風を推進力に利用し、一気に距離を詰める。距離を詰めた後は、普通なら拳に魔力を纏わせて威力を上げるところだが、今回はそのまま勢いをつけて拳を放つ。

「…天竜の「剛拳」&「こうけん」!!」

システイとパラディン自身の突進力が相乗効果を生み、魔力を纏っていない拳は簡単に盾を貫き鎧を粉碎した。魔力が吸収されなかった

め威力が落ちず、貫通力と威力がすさまじい一撃をもらに喰らったのだ。パラディンはボロボロ。魔力の吸収もできていないようだ。だが、システイも素手で盾と鎧を殴っているので、右手は完全に折れて血だらけになっている。

「ば、ばかな……。私の…私の最高傑作が…」

「さてと、次はお前の番だクソヤロウ!!」

システイは左拳をラーガスに向ける。ようやく殴れると思うと自然と力が入ってしまう。

「ひっ…く、くるな!!」

腰が抜けたのか這ってでも逃げようとするラーガスの首を掴み、上に放り投げる。

「みんなの痛み……受け取れクソヤロウ!!!天竜の鉄拳!!」

システイの怒りが込められた拳はラーガスの腹部に命中し吹き飛ばした。そのまま壁に叩きつけられたラーガスは気絶。無事報復が済んだシステイはエリナの待つ工房へと戻るのだった。

30. 帰還

ラーガスを倒したシステイは、後のことを町の衛兵団に任せて、気絶したラーガスを引き渡した。どうやらラーガスは数々の悪事を働いていたにも関わらず、その証拠が見つかっていなかったらしい。しかし、今回の一件でようやく逮捕に踏み切れたらしい。

これで役目も終わったので、システイは自分の怪我を手当てしてからエリナの待つ工房へと向かい始めた。時間を見てみると、一人工房から抜け出してからもう一時間半程経っている。やはり心配していたのか、刀を持ったエリナが工房の外で待っていた。

「どこ行ってたんですか!? 心配したんですよ!」

「ごめんね。でも、ちゃんと取り返してきたから」

そう言うときシステイは竜の顎アキトをエリナに手渡した。

「え、これって…」

「ラーガスは私がちやんとぶっ飛ばしたよ」

「本当に取り返してくれたんですね!」

「言ったでしょ? システイは強いって」

「シエリルもエリナちゃんのことありがとね」

頭を撫でてからシステイはシエリルを抱きかかえる。エリナは改めて頭を深く下げた。

「システイさん、本当にありがとうございました。感謝してもしきれません」

「いいよ。私が好きでしたことだから」

「いえ、是非お礼をさせてください。私に出来ることならなんでも言ってください!!」

「いや、でも……」

「是非!!」

何とか断ろうとはしたけど、結局強い押しに折れたのはシステイの方だった。だけど、お礼と言ったってして欲しいことなんて何も無い。だからと言って適当に流すのも相手に失礼だ。

「じゃあ……一つ、お願いしようかな」

何とかアイデアを捻り出し、願いをエリナに託した。

「ただいま〜」

「あら、おかえりなさい。システイ」

「ただいま、ミラ姉」

ギルドに顔を出してすぐにミラジェーンに声を掛けられ、二人で軽く言葉を交わす。休養中のことを簡単に話した後は、自分がいない間のギルドのことを聞いた。やっぱりナツは勝手にいなくなつたと言つて怒っているらしい。ちゃんと行く前に言つたのにな…。

「あ！ナツ、システイ帰つてきてるよ〜」

「ホントだ!!システイ、お前どこ行ってたんだよ!?!」

仕事帰りなのか、荷物を持ってギルドに戻ってきたナツはシステイを見つけると、すぐさま飛びかかってくる。

「ちゃんと説いたじゃない。休養にポーリユシカさんの所に行くつて」

「そだっけか?」

「やっぱりオメエが忘れてただけじゃねえ〜か、この馬鹿が」

「んだと!?!やんのかグレイ!!」

グレイが口を出したことでいつものように二人の口論が始まる。一人蚊帳の外となつたシステイはそのうちにマカロフへの報告へ向かう。

「マスター、今帰りました」

「おおおー、休暇はどうじゃった?」

「まあ、有意義な時間でした。十分に休んだのでこれから妹を探しに行こうと思います」

「そうか。…そのことはエルザから聞いた。見つかるといいのう…」

「はい…。」

マカロフと話終えた後、システイは早速準備のためにギルドを後にする。一先ずミストガンが最後にウインディと別れた所へ行ってみるが、一応いなかった時も考えて長旅の用意をしないといけない。しかし、ギルドを出てすぐに後を追いかけてきたルーシイに引きとめられた。

「待ってシステイ！」

「どうしたのルーシイ？そんなに急いで」

「これ、アカネリゾートのチケットなんだけどシステイもどう？」

確かアカネリゾートは王国でもっとも人気のある海辺の観光地だ。綺麗なビーチはもちろん、遊園地のようにいろんなアトラクションもあり、中にはカジノもあるんだとか。フィオーレに住んでいれば一度は行ってみたい所だ。でも、今のシステイにはやる必要がある。

「私はいいよ。ちよつとやることもあるし」

「エルザから聞いてるよ。ちよつと長旅になるかもなんでしょ？」

「そう。だから今回は遠慮しとくよ」

「じゃあなおさら行こうよ!!こんな機会滅多にないよ!？」

「何をしている。ルーシイ、システイ、早く準備しろ」

なぜか事情を知っているはずのエルザも準備万端でシステイを誘ってくる、というか行く前提で話が進んでいる。システイも行くことは最早決定事項のようだ。

「ま、リゾートの近くからも船は出てるし、そこからでもいいっか」

結局システイが折れることでリゾート行きが決定し、システイの旅はお預けとなったのだった。